呼吸

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呼吸

【Ｎコード】
Ｎ１７４３Ｄ

【作者名】
冴島岐之

【あらすじ】
どうでもいい、どうなったっていい。ただ、そこにピアノの音があったらいいな、とは思う。（イジメ描写が多少有）

第1話

置いてきたのかも。最後に弾いたのはどこだったっけ。音楽室、だったか。やっぱりそうだ、そう思い、さっきから何度も漁っているスクールバッグを改めて膝に乗せ、ガザガサと乱暴に中を見た。やっぱりない、焦りにも落胆にも似たため息だけが残る。

いつものように、あたしはピアノに向かっていた。少し固い、冷たい椅子に腰かけて。それから丁寧に蓋を開けて、さぁ弾こうと前を向いた。そこでようやく、そういえば楽譜はどこにやったかな、という具合に、肝心の楽譜がないということに気がついた。

完璧に暗譜はしている。大丈夫だ、なくたって弾ける。楽譜が目の前になくても、問題などない。あたしの指はきちんと動く。

電子ピアノの蓋を音がしないように下げる、それから上にぱっとカバーを掛け、立ち上がった。あの曲は、特別だから。弾けるとか弾けないとか、そういう問題ではないのだ。

あたしは財布や定期、必要最低限のものだけを残したスクールバッグを肩に掛け、いつもより少し早足で、駅へ向かうために誰もいない家を飛び出した。

外へ出てみると、思った以上に陽射しは強かった。

光はまぶたを通り越してじりじりと目を焼き、肌や真っ黒に伸びた髪を急激に熱していく。　風も吹いていたけれど、吹き抜けるというよりはねっとりと纏わりつくようで、気持ち悪い。とてもじゃないが、暑さを凌ぐための気休めになどならなかった。――うるさいなぁ。意味もなく宙を睨む。

ホームへ降りるとタイミングよく電車がすべりこんできた。電車が起こした熱風でスカートがめくれあがるの、右手で軽くおさえた。

一瞬の沈黙のあと、口が一斉に開いた。何かの口が並んでいるみたいだ、甘い匂いで誘いこんで、獲物が領内へ入った瞬間に口を閉じて閉じ込める。くだらない妄想を浮かべながら、遅れて電車へ乗り込んだ。

今さらだが、これから向かう場所は学校だ。中には口うるさい教師もいて、登下校は絶対に制服でなんていわれることもある。たとえば運動部の生徒がジャージで帰る姿を見かけるだけで、軽い生徒指導が入るらしい。中学生かと思うが、他の高校がどうなのかは知らないので、これが過剰なのか普通なのかはわからない。今更ながらに制服に着替えてくればよかった、と後悔するがすでに電車は走り出していた。汚れで曇った窓に映る自分の服装を見て、思わずため息をつく。

早く行って、すぐ音楽室に行って、楽譜を見つけたらすぐに帰ろう。誰にも会わなければいい。そうすればなんの問題もない。

目的の駅へ着いてからの自分の行動を頭の中でシュミレーションする。早く、早く着いてほしい。息苦しい車内、知らない匂い、電車の揺れ。動き出した瞬間からじわりじわりと這い上がってくる不快感。これには、いつまでたっても慣れない。頭の奥がずきずきと疼く。

電車は一駅ずつ目的地への距離をつめる。次第に車内の人口密度が高まり、話し声などの雑音が増えていく。座席の仕切りにもたれかかるように立ちながら、少しずつ気持ちが落ち着いていくのがわかった。少し耳のネジをずらせば、ひとつの曲のようにも聞こえる。それはなかなか悪いものではない。

あたしが通う学校の最寄り駅は結構大きな駅らしく、休日でも平日でも駅構内は人でごった返している。あたしが使う路線ではそこがちょうど終点で、やっと駅に着いたと思うと自分にはその意思がなくとも、人に流され電車の外へ出ることができた。

ちょうど時刻はお昼時だ。浮かれ気分の学生やカップル達の姿がやたらと目についた。

あたしは、人ごみが好きだ。

人ごみの中に紛れているのは、苦痛じゃない。たくさんの想いの中に、たくさんの他人の中に、埋もれるようにしているのが好きだ。ざわめきが心地よくて、誰もあたしにかまわない。まるでひとり、世界が違うような錯覚。

たとえば肩がぶつかっても、目が合っても、何も起きない。ただ、通り過ぎていくだけだ。他人の肌に触れる気持ち悪さより、ひとりではないのにひとりのような、そういう錯覚の心地よさが勝る。

学校、行くのか。考えるだけで息苦しくなる。いつも通り、駅構内を抜け出して人ごみから離れる、それをどこか苦痛に感じてしまう。とぼとぼと、当初想像していたものとは正反対に足の運びが鈍くなり、視線が定まらなくなる。この人ごみに流されるままいたら、どこへ行けるだろうか。答えなんて欲していない疑問を浮かべながらどこでもないどこかを見ていると、急に視界に影がかかったのがわかった。今まで流れてきていたはずの人ごみも、ふと前方から消える。その影の正体はすぐに人のものだとわかった、そしてその人物はあたしの目の前に立ちはだかるように立っていたため、立ち止まらざるを得なくなる。その人物の視線が、雰囲気から明らかにあたしへ向かっているとわかったからだ。

見たことのない黒を基調としたスニーカー。そういうデザインな

のか、シルバーや白、ピンクっぽいペンキのようなものがそのスニーカーを色づけている。
なんだろう、そう思って顔をあげるのとほぼ同時にして、声は降ってきた。

「なにしてんの」

言葉だけを投げるような、置いていくような口調だ。
その声は、不自然なくらいに心地よく、鼓膜をふるわせた。顔を上げた正面、そこにはひとりの男がいた。
少し暗めの、青の色が強いダメージジーンズに、唇が強調された外人風の女の顔が黒でプリントされた黄色いロングTシャツを着ている。黒い布地に英語が並んでいる穴がないタイプのベルトをして、ごつくて妙に禍々しいクロスのネックレスが胸の前で揺れていた。

「……別に」

こいつの顔、知ってる。そう思った。確か、クラスメートだ。

「俺んこと、誰だかわかる？」

「、く、久我（クガ）……」

普段から周りとは極力関わらないようにしているあたしにとって、クラスメートの名前を答えることには自信がなかった。高校二年になって二カ月程経つが、名前と顔が確実に一致しているのはクラスの半数いるかいないか、だ。しかしそれも、クラス替えをしたにも関わらず、以前のクラスメートが四分の一を占めていたおかげである。運がいいのか悪いのか、それはよくわからない。
その中でも、この男は目立っていた。常に周りに誰かがいて、騒

ぎのある場所には八割方いる。学年でも知らない人は少ない。クラスが同じになれば、必然的に目に入るタイプの人間だ。
それでも、会話も交わしたことのない相手の名前には自信がなかった。あたしはかくりと首を傾げ、ぼそりと小さく言葉にする。聞こえたかな、身長差から自然と見上げる形になりながら、男の顔を見た。

「おぉ、なんだ！　知ってたんだー。あ、下の名前は柳平（リュウヘイ）ね？　なぁなぁ、加賀美（カガミ）さんってさ、名前、マジで姫（ヒメ）ってゆーの？」

唇の端が少しだけ上がり、元から垂れていた目は笑うとさらに下がった。初めて会話をする割りに、口調も態度もどこか馴れ馴れしい。あたしと話す人は大抵敬語を使ってくる。そのため久我のその態度は新鮮なものでもあった。
――なんだ、この人。
それでも、あたしの顔にははっきり不快な感情が浮かんでいたと思う。初めこそ驚いたものの、たった今この男が口にした内容にイライラしてしまったからだ。

「あ！　ちょ、どこ行くの？」

何も話しかけられなかったことにして通り過ぎよう、そう思い足を踏み出すがすぐに道をふさがれた。覗き込むように首を傾げ、なおもやさしい口調で問いかける。色素のうすい瞳。その目の中に、あたしが映っているのが見えた。

「がっこ」

あたしはそれだけ口にし、また一歩左に踏みだす、すると久我もあたしが動いた方へ体をずらした。

「そのかっこで？」

右、左、左と同じことをしばらく繰り返す。行かせてくれないつもりなのだろうか。久我はあたしの正面をゆずらない。

久我はあたしより十センチ程身長が高く見える。つまりその分脚も長いという訳で、あたしの二歩は久我の一歩で簡単にふさがれてしまうのだ。

周りに溢れ返る人は、あたし達を避けるように流れていく。川の真ん中に取り残された大きな岩のような気分だ。大衆の流れを変える異物になってしまったあたしと久我は、時折迷惑そうな視線を投げられた。

「もういいでしょ、通してよ」

居心地の悪さから、久我を睨み上げた。ところが思いがけず久我の笑顔と目が合い、あたしの目は急速にその威力をなくした。

それはいつも周りに見せるもので、今は確かに、あたしに向けられたものだった。

「またね」

不自然な笑い方をする人だ。クラスで見かける度に感じた違和感。目の前につきつけられて、ようやくわかった。綺麗すぎるのだ、笑っているように見えるよう計算されたような、まるで笑顔の模型だ。

それでもいざ目の前にすると、心を奪われてしまうような感覚に陥った。それは笑顔のせいでもなく、普通よりいくらか整っている顔のせいでもない。色素の薄い茶色の目の奥の黒が、真っ直ぐに捕えて揺れなかった。どこか見透かされているような、鋭い目をして

いた。

綺麗な目だった。あたしは軽く深呼吸をしてから、その人ごみを抜け出した。

学校に着くと、真っ直ぐに音楽室へ向かった。四階の、特別教室ばかりが集まった第二校舎。この校舎からは、グラウンドがよく見える。

防音のための重い扉を押し開ける。取っ手がひやりとして、今の時期には心地のいい冷たさだ。目の前には閑散と並ぶ机、その向こうにどこか神聖さを感じさせる、黒い光沢を放つピアノ。今は小さく片付けられ、黒いカバーが覆っている。のぞく足の華奢な造りからは、あれだけの力強い音が、あれ程の繊細な響きのそのすべてが、あそこから生まれてくるなんて想像もつかない。

ピアノに近づき、カバーをめくる。しばらく楽譜を置いていきそうな場所を探すが、そこには白い紙切れなんてものはなかった。おかしいな、そう思いつつも机の中や教員が利用している棚の中までも探してみる。それでもやはり、あの楽譜らしきものはどこにもなかった。

他にどこで楽譜を広げただろうか。必死になって、最後にあの楽譜を出した場所を思い出そうとする。確かにそれは、この音楽室だったはずだ。家であれだけ探してなかったのだから、この学校のどこかにあるはずなのだ。しばらくそうして同じ所も何度も探し回っていた。

「あら」

あまりにも唐突に扉の開く音がして、続いて聞こえた女の声に、あたしはびくりと肩を揺らした。

「なにしてるのよ。……その格好は？」

怪訝そうな顔で立つひとりの女、黒いパンツに白いシンプルな袖がほとんどないTシャツを来た音楽の教師だった。口うるさい上に頭の回らない女。きっとあいつには給料と男のことくらいしか頭にない。

「楽譜、探してるんです。学校に忘れてしまったみたいで……先生、知りませんか」

無論そんなことを思っているなんてわからないよう、ただ淡々と聞く。

多分、この人はあたしのことが嫌いなのだろう。眉の間に寄ったしわはなかなか消えない。

「見なかったわよ。それより、学校に私服で来るなんて、なに考えてるの？」

「そうですか、失礼しました」

「ちょっと……っ」

引きとめようとする先生の横をすり抜け、そのまま教室へと向かった。そこでもやはりなかった。ごみ箱の中まで探してみたが、楽譜は見つからない。

家で探したりなかったのかもしれない。そういい聞かせ、帰ることにした。そんなはずはない、そう思いながらも、いつかひょっこ

り出てくるだろうと思った。やはり私服で校内をうろついているのはあまり好ましくないようだ。面倒なことはなるべく避けたい。

学校は息苦しい。教室も、授業も息が詰まる。先生と呼ばれて偉くなったつもりでいる人には、どうしようもないくらい嫌悪する。体裁ばかり気にする大人、肝心なことなんて何も教えてくれないくせに、助けてなんてくれないくせに、何を偉そうに指導しているのだろうか。理解できないし、理解したくもない。

あたしは、誰の気にも止まらない。空気みたいな、塵みたいな、そういう存在に、なりたい。もっと、ゼロになりたい。

産まれてきたくなんかなかった、あたしだって。

苦しい。息が詰まる。

誰かと仲良くやろうなんて思わない、誰もあたしと仲良くしようなんて思わない。

あたしに話しかける人はみんな、あたしを見下している。哀れみの色を浮かべた目で見ている。どこから流れたのかは知らないけれど、あたしには父親がいない。ずいぶんと前に事故で死んでいる。あの子が暗いのはそのせいなんだよ、小さい頃そう自分の子供に話し、だから仲良くしてあげてね、なんていう親が必ずひとりはいた。あたしはその頃からずっとひとりだった。

かわいそうだなんて、あたしは思わない。初めからいなかったと認識してしまえば、なかったと思えば、それでいい。かわいそうなのは、あの人だ。あの人だけだ。あたしみたいな子供を抱えて、愛していた人に先立たれた。

あたしはかわいそうじゃない。だから、あたしのせいにすればいい。あの人が抱える不条理ってやつも、全部。

ここは、学校は、人の集まる場所はきっとすべて、あたしにとっ

ては毒みたいなものだ。苦しくて息が詰まる。この世界は、きっとそういうことばかりなのだろう。
ここに存在する空気はあたしを縛る重いもの。呼吸しなきゃ、死ぬ。でも、吸い込む度に汚染されて、吐き出す度に奪われてくようだ。
それはまるで深い海の底にいるようで、圧迫されて、息苦しくなって、汚れていく。毒のように侵入してくるそれのせいで、あたしはそこから浮上できない。きっと一生、ここにいるんだと思う。
他人と群れて、そのために表面ばかり取り繕うなんて、バカみたいだ。

駅に戻ると、なぜかまた久我に会った。にやりと笑う顔は、相変わらずだ。
あたしは久我の姿を認めると、あからさまにいやな顔をした。誰もあたしになんてかまわない。久我みたいな奴はその典型だ。暗い奴となんて話したくないと思っているのだろう。それでもかまうとしたら、イジメの対象にするためだ。
それなのに、久我の目は嫌いじゃないと思った。そこには同情も哀れみもなかった。ただ、真っ直ぐだったから。

「探しモノは見つかった？」

そういって、帰ろうとするあたしの正面に立つ。左右に流した長い前髪が生ぬるい風にふわりと、どこか不釣合いに、涼しげに揺れた。

「なんで、知ってるの？」

何かを探しているなんて、いった覚えはない。疑問符が浮かんで

いるあたしの目の前に、久我はにやりと笑って一枚の紙切れをちらつかせた。
あたしが探していたもの、他人から見たら、それはただの紙切れだ。

「……なんで、返してよっ」

見間違うはずは、ない。それは確かにあたしの楽譜だった。だけどそれはあたしだけの、どこを探したって同じものはない楽譜だ。

【ｔｉｔｌｅ：　　】

すかさず手を伸ばした、が、空を切るばかり。たかが七、八センチの身長差なのに。悔しさからギリっと唇を噛んで睨みつけた。急に必死になったあたしの姿に、久我はふっとバカにしたような、どこか楽しんでいるような笑みをこぼす。

「明日、明日の一時にさ、あの公園に来て」

久我はあたしから楽譜を遠ざけ、あの真っ直ぐした目で見た。急な態度の変化に、あたしは目を見開く。

「なんでよ」

あたしは強い口調で迫る。自分でもわかるほど不機嫌な響き。公園で、しかも明日、今日じゃなくてわざわざ明日、何をしようというのだ。折角の休日なのに、久我はなぜあたしを呼ぶのか。他に遊んでくれる奴なんて、片手じゃ足りないくらいいるだろうに。
あたしは久我なんかに用はない。楽譜さえ返してもらえれば、そ

れでいい。

「来たら教えてあげる。そんとき、これも返すよ」

「……わかった。明日、一時ね」

あたしがそういうと、久我は顔をゆるめて、笑った。それはさっきみたいな不自然な愛想笑いじゃなく、視線を奪っていくような。

「おう、待ってるっ」

そういうと、久我はあたしの横を抜けて帰っていった。笑った顔が、どうしてか頭から離れなくて、あたしに向けられたその顔が、いつもの周りに見せるそれとは違っていた、それだけなのに。

あれは、久我の笑顔だったんだろうか。それなら、少しだけかなしいと思った。

疑問はいくつも浮かんだ。だが、どうすることもできなかった。答えは今さっき、帰ってしまったのだから。

あの、笑顔と一緒に。

＊＊＊

第2話

あたしは無理やりとりつけられた約束に少しでも抵抗するかのように、わざと遅れてそこへ向かった。もうすぐ、一時三〇分だ。帰っているかもしれないな、と思う。それでもいい。あの楽譜の場所がわかっているなら、手元になくてもいい。たとえば捨てられても燃やされても、どこへ行きついたかわかるならそれでいいと思う。

でも、なんとなくだけれど、久我なら待っている気がした。楽譜だって、ちゃんと返してくれるだろう。少なくとも一時間くらいは平気な顔をして待っていそうだ。それが昨日言葉を交わして得た、久我柳平という男のイメージだった。

この辺の人間、生徒達にとって『公園』といえば大きな池に古いアヒルボートがある、この公園しかない。放課後にはあまりにも広いからか、誰かと出くわすこともめったにないらしく、デートにもよく利用されているらしい。

そう、この公園は公園といってもかなり広い。中央には体育館やスポーツジムまで完備されているような、とても大きな公園なのだ。バス停だってこの公園の周りの道路だけで三カ所はある。

つまりは場所まで指定してくれないと、待ち合わせをした人間と時間通りに会うことなど初めから不可能なのだ。

一時頃に駅に着き、五分程歩いてこの公園の北側の入り口に来た。それからずっとぐるぐると待ち合わせに使われそうな場所、公園を一周するコンクリートの道を回っている。所々にベンチがあるため、待ち合わせにそのどこかが使われることはよくあるのだ。クラスの親睦を深めるため、行事の打ち上げのため、どこかへ食事に行く。そういうときは学校ではなく、この公園が待ち合わせに使われるのもよくある話だった。

――困ったな。

案内板の前で立ち往生してしまう。この道をもう少し行けば、確か池がある。大きな、アヒルボートのある池だ。とりあえず池でも見て涼もうか、そう思ってまた歩いた。

こういう場所は、まるでひとつの街のようだ。いつも見ているものとは違いすぎる、きれいに刈り取られた芝や、動物の形になっている木々。随分とお金がかけられているのか、そういう趣味を持った人間がいるのか、それはよくわからない。見れば見るほど、世界が変質していくような、おかしな感覚に陥る。

ようやく木々が並んだ道から抜け、池が視界に入った。中に入れないよう高めの柵が周りを囲んでいた。その柵に手を置き、以外にも水の色をした綺麗な池を見つめた。両手を置いて、本格的に柵に寄り掛かる。二台のアヒルボートが動き回っていた。

――鳥のさえずり、葉がこそこそと揺れる音、池に石を投げこんだような音。目を閉じると、周囲の音が余計に際立っていくような気がした。唄、みたいだ。風がそよそよと流れ、一緒に声を運んできた。本当に誰かが歌っているようだ。少し掠れたその声は、まるですすり泣く声のようにも聴こえた。

うっすらと目を開ける。ゆっくり、歌声が消えないよう静かに、声の聞こえる方へ足を向けた。川に沿って道はゆるやかにカーブしている。すぐそこだ、けれどまだ姿は見えない。

ようやく見えたベンチの端、近づくと一人の男が座っているとわかった。大きな木が影を作るように設置されたベンチで、どこか空ろな様子で視線を泳がせている。その口はかすかに開き、空気がもれている。

こんなとこに、いた。

しばらくそれを聴いていたいと思い、あたしはそのまま立ち止まった。かなしい、そう思った。どうしてか、なんてわからない。ただ、昨日去り際に見せた笑顔と重なって、喉の奥、胸の奥がきゅっと締まるような感覚がした。

ずっと聴いていたい、苦しいような気もしたけれど、そう思った。ところが久我はすぐにあたしの影に気付いてしまい、はっとした様子で口をつぐんでしまった。

「なんだ、声かけりゃいいのに」

ふにゃりと顔を崩して、恥ずかしそうな表情を浮かべる。遅れたことには、怒ってないようだ。

「声が、綺麗だったから」

いうつもりはなかったのに、その言葉は自然と口からこぼれた。久我は少し驚いたように目を見開いき、それからほんの少し頬を赤くして、「ありがとう」といった。

嫌な奴だ、苦手だ、そんな風に感じていた部分だってある。何を考えているのかなんて、まったくわからない。けれど、嫌い、ではない。たとえば声とか、表情を作る唇とか、何よりその薄い茶色の瞳に、どうしようもなく心を惹かれた。

久我の目には、感情がないのかもしれない。それはあたしにとって、どこか安心できるものだった。

「……楽譜、」

思い出したようにここまで出向いた用を口に出す。それから『返せ』と要求する意味で右手を差し出した。久我はにやりと笑ったかと思うと、立ち上がって差し出したままのあたしの手を取った。

「お願い、きいてくれたらね」

気が付くとそこには見慣れない景色が立ち並んでいた。風は潮の匂いを運んでくる。

あの台詞を聞いて、本当は帰ろうと思った。バカらしいとも思った。

「楽譜さ、俺、忘れてきちゃったんだよね。だから、とりあえず俺んち行こ？」

そのとき久我が浮かべた笑顔は完璧だった。完璧すぎて、本当の用件は別にあるんだとわかった。忘れた、なんて嘘だ。

その日も特に予定はなかったし、何よりそんな嘘をついて何がしたいのか、あたしは気になってしまった。だから今、しょうがなくここにいる。

ちらりと横を見る。バス独特の匂いが気持ち悪さを誘う。久我の目は相変わらずだ。視点が定まっているような、その先を見ているような、少し、緊張しているのだろう。肩がガチガチと固まっている気がする。その姿が少し、おかしかった。強引に連れてきたのはそっちのくせに。

たまには誰かと過ごすのも、悪くはないかもしれない。

不特定多数の人の波にもまれるよりも、ひとりだけの他人ではない人間と過ごすというのも、相手によっては心地いいことなのかもしれない。たとえばそこに会話がなくても。

そんな風に考えてしまう自分がおかしくて、ふっと息をもらした。ただそこは、いつもより息苦しくなかった。教室よりも、電車よりも、家よりも、久我はずっとかなしくて、綺麗だと思った。水源みたいだ、山奥の、誰も知らない水が生まれる場所。

吐き出す度にあたしの中の綺麗だった部分が奪われて、吸い込む度に毛細血管のその先の先まで汚染される。だけどきっと、久我は汚れない。表面だけ周りに染まったふりをして、それでも本質のもっと奥の部分は侵されないまま、ずっと綺麗で、かなしい。

バスから降りて一〇分程歩いた。そこに目的の場所はあった。木造の一軒家だ。

明らかに年期の入ったその家は、久我とは不釣合いな威厳だとか、そういう古臭い、昔ながらの雰囲気があった。隣の家は新築なのだろう、洋風の造りをしている。その向こうも、そのずっと向こうも、向かいの家も洋風の建物だ。久我の家だけ和風で、その通りでは目立つ家だった。

特別大きい訳ではない、普通の家だ。ただその和風な作りの家は、久我には合わないと思った。目立っている、その点では共通しているかもしれない。

多少の不安を抱きつつ、あたしは促されるままに家の中へ足を踏み入れた。ふわりと香るのは、おそらく木の匂いだろう。古そうに感じたが、中は綺麗だった。大切に使っているのだろう、床板が光っている。

「あんま、キレイじゃないけど」

久我の後に続き、おそらく居間なのだろう、そこにあった階段を上がっていった。時折軋む床の音が、静かな家に響いた。他に誰も、いないのだろうか。

「ここ、俺の部屋。汚いけど……どーぞ」

久我はふすまを開け、あたしに入るよう促した。この家にはよく合った、畳が姿を現した。畳特有の香りがするような、そんな気もした。少し色褪せている。

久我がそういって気にするほど、部屋は汚くはなかった。ただ、置き場がないのだろう。畳にも机の上にも、雑誌や本が置いてあった。

「あ……」

思わず声をもらす。一歩踏み入れたそこは、写真の海だったからだ。棚にはカメラと、おそらくそれに伴う品々、所々にかかったコルクボードは一面が写真で埋め尽くされている。カーテンレールの上には額に入った大きな写真がいくつか掛けられていた。

「あんま見んなよ、いいもんじゃねぇから」

そこは暑かったはずなのに、ぞわりと鳥肌がたった。不快ではなかった、ただ驚いた。口が開いたままの状態で、呆然と立ち尽くす。そこら中に散らばった、画。その色はどうしてか、かなしい色ばかりだ。晴れ晴れとした空の色ですら、どこか空虚な印象を与えた。

「……これ、自分で撮ったの？」

「あぁ」

「全部？」

あたしは写真に夢中になっていたのか、いつのまにか部屋の中心にいた。そこから未だ部屋の入口、ふすまに寄りかかったままの久我を振り返った。その表情は逆光を浴びていてよく見えない。けれど、目だけが淡い光を湛えてこちらを見ている。

あの目だ。久我がいつも見せる、あの目だけがはっきりと見えた。

「あぁ、全部」

すごい、唇がすぐにそう動いた。声に出したかはわからない。ただ、そう思ったことだけは確かだった。

「手に……とっても、いい？」

掠れた、呟くような声しか出ない。だが静かな室内では、そんな小さな声でもよく響いた。

あたしは一枚、周りと距離を置いている写真をじっと見つめる。コルクボードの真ん中に、囲まれるようにして貼ってあった。コルクボードにある写真はぴったりとしたサイズの透明なビニールの袋に入っていた。

「どーぞ」

どこか嬉しそうな響きを含んだ返事を聞き、あたしは慎重に画鋲をはずした。

ここにあるもの全部、久我が写したものなんだ。そう考えるとまたぞわりと鳥肌がたった。そのほとんどは空と海を写したものだ。たまに紛れ込んでいるのは建造物で、おそらく高校だろう。ただそ

の中には、誰かを写したものは一枚もなかった。

「そのへん座っていいから、ね。俺、飲み物でも持ってくる」

それからすぐに久我が部屋を離れていく、床の軋む音と足音が聴こえた。あたしはただ、魅せられるように写真を見つめる。

青ではなく、紫色をした空の色。黒く揺れる海。とんでもない所から太陽の断片が覗き、空は二つに分断されている。その境目を、指でなぞってみた。波の音が聴こえたような錯覚を起こす。

なんて、綺麗な世界。

人工にはない色をした空が、無性にほしいと思った。この色は、好きだ。

「お茶でよかったー？」

カランと氷がガラスのコップにぶつかって、涼しげな音を出す。話しかけられ、そこでようやく写真から目を離した。

おかしい。心臓が、痛い。掴まれたみたいに。刺されたみたいに。痛い。

「うん、ありがとう」

そういってコップをひとつ受け取った。指先にひんやりと冷たさが伝わる。久我は部屋の右隅に位置した机にお茶を乗せてきた盆を置き、そのまま椅子を引いて座る。それからごくごくと喉をならしてコップの中のお茶を飲み干した。あたしはそれを見てから写真を元の位置に戻し、少し離れた場所からもう一度じっと写真を見つめた。ビニールが光に反射しているのか、離れると色も景色もずっと曖昧になった。

「……いつも、こんな風に見えるの？」

「ん……？　なにが」

中身の減ったコップを片手に、声を反響させるようにして、遊んでいる久我に視線を向ける。こんな子供みたいなことをしている奴が、あの写真を撮ったのか。なんだか疑わしい気持ちもする。

でも、ここにあるのだ。紛れもなく私の前に、存在している。誰かが写した、そのことに違いはない。

「世界……景色、かな」

「うん」

疑問符の浮かんだような声で返ってきた。久我はまた、ごくり、喉を鳴らした。コップの中身は完全に空になる。それから中身のなくなったコップへ、すぐに持ってきていたペットボトルのお茶を継ぎ足していた。

久我が見ている世界、一枚の写真。

「きれい……」

視線を写真に戻した。カラン、と音がした。

しばらく、あたしも久我も何もしゃべらなかった。あたしは、ただ、時の止まった景色に心を奪われた。その間に久我は部屋の窓を開けた。時折吹き込む風はからりとして気持ちがいい。

さみしい、冷たい色。でも、どこかやさしい世界の景色。そこにあるものをただ、無条件に受け入れてしまうような、無知な子供のような、真っ直ぐさ。

ただの写真なのに、小さな紙なのに、それが痛いくらいの真っ直ぐさを持ってあたしの目に飛び込んでくるのだ。

痛い、胸が。息苦しいのに、目が離せなかった。あたしが同じものを見てもきっと、こんな風には映らないだろう。いつの時間帯だろう。太陽が海にあるなら、それは沈むときの写真だろう。日没、普通だったらそれは太陽が沈むことを惜しむのだろう。ただその写真には、それを待っていたような、次第に高まっていく闇の支配を望んでいるような、そんな印象を与えた。

コホン、とわざとらしい咳がした。久我を見ると、そこには真剣な瞳があった。感情はない、その代わりにあったのはひた向きな熱意にも似た真っ直ぐなもの。

あたしは、あの目にどう映っているのだろうか。

「俺、さ、今まで風景ばっか撮ってたんだ」

「……うん」

部屋を見渡してみる。どれだけ見ても、空と海ばかりだ。そのすべてが綺麗だった。なんだか羨ましくなる。

あたしには見えない世界の色。知らない、場所。

「全部、俺が好きなもん。撮りたいと思ったやつだけだ……その、加賀美がさっきから見てるのは、一応、自信作？」

今まで見たことのない種類の笑顔が浮かぶ。その目にかすかに浮

かんだいとおしそうな感情。そうして笑うと、久我の目は糸のように、顔のしわのように見えた。

垂れた一重の目は遠目から見ると開いているのか開いていないのかわからないが、その奥にある瞳の存在感は大きい。それがわずかに隠れるだけで、久我の目はとてもやわらかくなった。

それでも、目が離せなかった。どこか一歩引いた他人の目線だったと思う、それまであたしが見ていた久我の笑顔も、瞳も。ただ、飾られた写真を見る目は、慈しむような誇らしく思っているような、確かな久我の感情が見えた。

久我の瞳の色は、綺麗な色をしている。

空気を吸い込みすぎた肺が心臓を圧迫しているような、何かに掴まれたような、痛いと思うのに、苦しいと思うのに、それは苦痛ではなかった。

自分がおかしくなっている、だけどその痛みも苦しさもすべて、どこか心地のいいものだった。

「……なぁんか、最近撮りたいと思えなくなってさ。飽きたっていうか、ずっとさ、ここに、違和感があって、」

久我はちらりとあたしが見ていることを確認すると、「わかんねーよなぁ、ごめん」それだけいって困った顔を浮かべた。あたしは何もいわず、ただじっと久我の言葉を待っていた。

「そんでも、なんか、うん……」

そういったきり、久我は顔を伏せた。横に流していた前髪がふわりと目を隠してしまう。口にすることを躊躇っているようだ。首筋にひとつ、汗が流れたのが見えた。それは暑さのためではないだろう。

「俺、加賀美さん、撮りたい」

どれくらいだったか、お互いを見つめたまま沈黙していた。

先に口を開けたのは、やっぱり久我だった。

「ね、俺に時間ちょーだい？」

どこか甘えるような、ねだるような口調で久我はそういった。座っていた椅子ごとあたしの側に寄って来て、下から顔を覗き込むように見上げてくる。

「……いやだ」

意味を理解するのに、数秒。一瞬の躊躇いの後、あたしは拒否の返事をした。考えるまでもないはずなのに、久我の目を見ていたら『いいよ』といってしまいそうな自分がいたことに気がついて、あたしの頭の中は軽く混乱する。

「別にポーズとかとるわけじゃねぇよ？　ただ、うん、普通に過ごしてくれれば――」

「いやだ」

少し大きな声になった。細いプリーツの入ったグレーのスカートが、声の大きさに比例するように揺れる。

何かをいいたそうにしている久我の口は何度か開閉を繰り返していた。それでもなかなか出てこない言葉。ようやく決心したかのように言葉にしたが、それはさっきまでとは打って変わって弱弱しいものだった。

「……なん、で？」

「あたしじゃなくてもいいじゃない」

あたしはすぐに返事をする。そうだ、あたしじゃなくてもいいことだ、それは。

自分が久我の目にどう映ってるか、きっとわかってしまうだろう。それは、怖い。他人の目に映る自分なんて、知りたくもない。

「ちがうじゃん」

久我はどこか安心したように、それでも落胆は隠さずにため息をついた。

「加賀美さんがいいんだよ、俺は。ダメなんだ、他の奴じゃ……ちがうんだって」

わかんねぇよな、久我はまたそう呟いた。そう、わかりたくなんてない。

座っている分低くなった位置から、久我は上目遣いで、訴えるようにあたしに目を向けた。今日のあたしは、いや、昨日からあたしはおかしい。断って、無視してしまえばいい。

ただ少し、久我の目に、久我という人間に、興味を持ち始めている。そんな自分がいること自体、あたしのとっては非常事態だけれど。

「どうして……あたし、なの？」

窓から風が吹いた。うっとうしく纏わりついていた空気が連れ去

られていく。それと同時に、携帯が鳴った。どこか聞き覚えのある曲だ。

「、時間か」

アラーム音だったらしいその音楽を止める。真っ黒な久我の携帯。もしかして今のは、公園で久我が唄っていた歌だろうか。

久我は重そうなカバンを持ち上げる。

「加賀美さんも来る？」

久我があたしを見て、静かに、低くそういった。

澄んだ、綺麗な目をして。

歩く度に潮の匂いの密度が増していく。最後に大きな道路を渡ると、そこにはもう海が見えた。それは、どこか寒々しい光景だ。久我の部屋にあった写真の方が、ずっと綺麗だったなんて思ってしまった。きっとこの海を撮った写真だったのだろうけれど、同じ海には見えなかった。

下は歩きやすいようにと木で組まれた歩道があったが、そのほとんどが砂で埋まっていて、傾き始めた太陽の下でそれはきらきらと光った。

その一方で、所々に空き缶やお菓子の袋のゴミだとか、破れたビニール袋なんかが落ちている。海から流れてきた流木と絡み合って、黒いゴミの塊が点々と見えた。

「誰も来ない場所があるんだ。ここは……汚いけどな」

そんなあたしの視線に気付いてか、久我が急に口を開いた。それでやっと今まで無言だったんだ、と気が付く。いつも目にしないものばかりで、会話がなくても退屈はしなかった。
それに、あたしと久我の間で会話が弾むとも思えなかった。今まで話したことのない人と、何を話せばいいのだろう。
ただ、そこには沈黙があって、どこか規則的な波の音が、まるでうたうように静かにやさしく、それでもそれはずっと遠い所まで響いて、それが心地よかった。

しばらく、無言を楽しむように歩いた。既に夕闇は迫っている。にもかかわらずサーフィンボードを片手にした人達はまだ海を楽しんでいるようだ。今はまだ六月。梅雨はまだ先だ。確かに陽射しもずっと強くなったが、きっと海の水は冷たいだろう。
そんな人達の姿を横目で認めながら、久我のうしろに続いてさらに奥へと進んだ。今日はこの背中に連れ回されている、そう思うと少しその背中が憎らしくなった。今日のロングTシャツは青だ。昨日に引き続き、原色。それに白いジーパンを履いていた。ベルトは昨日のものとは違って黒の二穴タイプのベルトだった。あのクロスのネックレスは昨日と同じものだろう。
うしろから見た久我の茶色い髪の毛の先がくるんとはねていて、思わず笑いそうになった。

砂浜が視界に広がり、左側には人が入るのを拒むように高く聳え立つコンクリート。その上は道路らしく、ガードレールが見えた。
いつの間にか整備されていた道は砂だけに変わり、黒い山のような岩場が近くに迫っている。それはいくつもいくつも並んでいて、道はここで終わりなのか、そう思った。
けれど、久我は迷うことなく真っ直ぐ突き進んでいく。足場に気

を使いながら、その背中を追いかけた。久我は岩の前で立ち止まり、これ以上どこに進もうというのだろうとその視線の先を追った。その先、岩には人ひとりがどうにか入れるくらいの穴が開いていた。さっきからこれに向って歩いていたのか、背中でわからなかったあたしはひそかに感動を覚えた。

久我はなんの迷いもなく、その岩のトンネルをくぐり抜けていく。足場は変わらず砂だけで、少しだけ屈んでそのあとを追った。

また光が目に入ってくると、少しの眩しさにまばたきを繰り返す。そこはどこか見覚えのある景色で、あたしは必死にそれを見ようとした。

「……写真の、とこ？」

口の端だけを上げて、久我は笑う。その笑顔が、無条件に息を詰まらせる。

そこにはさっきまで感じていたような人のいる気配はなく、波の音だけが響いていた。

久我は先に砂浜へ降りて、持っていたリュックからごそごそと何かを取り出す。久我の手には収まりきらない、その無機質な黒いもの、カメラ、だった。そこらにあるものとは違って重量感がありそうな、本物のカメラだ。部屋にも一台あったはずだが、少しタイプは違うようだ。

久我はそれを、大事そうに胸に抱えた。

「俺、一日の中でこの時間帯が一番好きなんだ」

静かに隣に腰を下ろした。少し湿っぽい、砂浜。あたしはそのままぼんやりと海に視線を投げる。

「だからさ、いっつもアラームかけんの。時間変わるから気づいたときにちょっとずつ時間ずらしたりしてさ、沈むとこ見て、そんで今日も頑張ったなーって思ったりすんの」

ここ、俺の家みたいなもん。そういって久我は少しだけ笑い声を上げた。

――焼けるようなオレンジ色した、波はきらきら反射して、まだ太陽があることを教えてくれる。それはやはりというか、すごく綺麗なものだった。月並みの言葉。本当はこんなんじゃ足りない。わからない。伝わらない。でも、他の言葉は見つからない。

久我なら、きっと……写真にできるのだろう。部屋にあった写真を思い出す。同じ場所だけれど、まったく違う景色。変わらないのはきっと、波の音だけだ。

ふと横を見ると、久我は手で四角を作り、片目をその四角から覗くように何かを見ていた。

「なにしてんの」

単純に、その行動は疑問だった。久我は姿勢を崩さず、難しそうに、どこか眩しそうに顔全体を歪めながら、きちんと返事をしてくれた。

「んー、知らない？　天然レンズ」

「なにそれ。天然？」

久我が？　あたしが聞くと、久我はカメラ持ち上げていった。

「これ、人工レンズだろ。だから、こっちは天然」

そういって笑ってみせる。不思議なことをいうな。あたしの顔を見て、また、久我は笑った。あたしも少し、笑っていたかもしれない。

「撮らないの？」

「今はね。いったろ？　俺、撮りたいものしか撮らねんだって」

好きだけど、今は違う。そういってにこりと笑うから、あたしは急に恥ずかしい気がした。久我の視線に耐え切れなくなって、ぱっと顔を下に向けた。白い砂粒が視界を埋め尽くす。つんと潮の香りがした。

きっと久我は、『天然レンズ』から景色を覗いているのだろう。そっと様子をうかがうと、しっかり前を見ている横顔があった。それは、元からの顔立ちもあるのだろうけど、綺麗だな、なんて思ってしまった。

天然レンズか。指で作った四角でも、久我にはカメラになる。世界が、そこから見えるのだろう。

久我が撮りたいものは、久我にとってのなんなのだろう？

「加賀美さんもやってみれば？」

あたしの視線に気づいたのか、久我は静かに笑ってそういった。またあの笑顔をしている。不安を感じさせない完璧な笑顔だ。気持ち悪い、そう思ったが口には出さなかった。

とりあえず真似をして、おずおずとそこを覗いてみた。けれど、

なにも変わった気がしない。なんとなく、また久我を見た。
その顔があまりにも惹きつけるものだから、わかってしまった。
久我はレンズを通して語っている。撮りたいものを撮るから、その理由はきっと、写真になる。久我は想いを、言葉をフィルムに焼きつけてるんだな、と。
それがこの人にとっての感情の表わし方なのだろう。久我の目にはほとんどない感情のすべてが、写真には溢れている。

気付いたら久我のことをずっと見ていたらしく、急に横を向くから目が合ってしまった。あたしがじっと見つめていたことに、不思議そうな顔をした久我が口を開く。

「どうした。なんか変？」

「なんでもない」急に恥ずかしくなったあたしは、ぐるりと海を向く。「あたし、はじめてきたの。海」

「はじめてって……ここじゃなくて、海？」

久我は心底不思議そうな声でどういった。その目が、あたしを捕らえているのが、わかる。
厳密にいえば、初めてではなかった。けれど、小さかったあたしは覚えていない。写真には残っているが、それだけなのだ。昔、一度だけ見た家族のアルバムにひっそりと。それも今になっては、どこにあるのかわからない。わかってもきっと、見ることはできないだろう。

「そう。遠くまでいったこと、ないから」

うわ言のようにそういうと、久我はふぅんと気の抜けた返事をし

て、今度は直接海を見ていた。あたしは、伝えられないことはわかっていてもいわずにはいられなくて、呟く。
どうしてこんなに胸が痛くなるのだろう。

「こんなにきれいだとは、思わなかった」

久我はまた口の端だけを上げて、笑った。「それはよかった」って、同じように、聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で呟いた。
その声を聞いたら、なぜだか泣きそうになってしまった。

たわいもないおしゃべりを繰り返し、静寂をも楽しみ、気が付いたら時間は過ぎていた。
すっかり太陽が海に入ってしまうと、辺りは真っ暗で無暗に動けなくなった。人がいない夜の海は妖しく神秘的な香りがして、今にも得体の知れない何かが打ち上げられてきそうだ、なんて想像がよぎる。吸い込まれてしまいそうだと思いながら海を見ていると、久我は突然、焦ったように立ち上がった。

「帰んなくていーの？　てかごめん。気付かなかった。もう八時過ぎてるしっ」

今さら何をいうんだ、この人は。そんな久我の言葉に、思わず吹き出しそうになる。この人は、何も知らない。そうしてあたしを、普通の女の子のように扱う。

「いい。気にする人なんかいないから」

久我はあたしを知らないのだ。当然のことだけれど。あたしだって、久我を知らない。立ち入ったことには、お互い触れていない。

久我は一瞬だけ顔を歪ませた。だけどすぐに、あの完璧だけれど不自然な笑顔で「送るよ」とだけいい、あたしの手を掴んで立ち上がらせた。

一度荷物を取るために久我の家へ戻り、それから駅へ向かった。家には上がらなかったけれど、久我の母親らしい人の声が聞こえた。この人は、この家は、壊れていないんだな。そう思って、そこで考えるのを止めた。

夜になってしまったせいか、駅へ向かうバスの本数はかなり減っていたようだ。そのために次のバスが来るまで三〇分待たなくてはいけなかった。それを知っていた久我は、あたしが断っても送るといって聞かなかった。それ以外では帰さないとでもいいそうな鋭い口調には耐えられず、仕方なく久我の自転車のうしろに乗せてもらい、駅まで向かうことになった。

あたしは落ちないように、と軽く久我の腰に触れる。と、ぐいっと手が引っ張られ、姿勢を保てずにあたしはそのまま久我の背中に抱きつくような体勢をとった。

「つかんでていいから、落ちんなよ」

つかさっきの、くすぐったいからやめてね。そこまでいわれてしまうと、あたしはその姿勢を崩しがたくなってしまった。それならきっと、動かない方がいいだろう。振り落とされてはたまらない。ゆっくりと腰に腕を回し、両腕で離れないように抱き締めた。思っていたよりも大きくあたたかい背中に、心音がひとつ、大きく響く。

「……落とすなよ」

あたしは小さく返事をして、それに従った。それからしばらく、風を切る音だけが鼓膜を通り過ぎていった。

次第に駅へ近づいているのか、だんだんと辺りの光度が増してきた。光源も、増えた。車の音もその量も増えている。湿った、熱っぽい空気が肌をなでた。

「ありがと」

駅に着くと、あたしはぱっと自転車から降りた。それだけいって帰ろうとしたあたしの腕を、久我は掴んで引き止める。久我はまだ自転車にまたがったままだった。その不安定な姿勢で、顔を見ると何かをいいたそうにして口元を歪めた。

「どうかした？」

「……楽譜、いいの？」

「お願い、きいてあげないといけないんでしょう」

きけないから、小さくそういって、お願いを思い出して眉を寄せた。

「きいてくれないの、ホントに？」

久我は覗きこむように、あたしを上目遣いに見る。きくということはつまり、久我の被写体になる、ということだ。

「もう一度書き直せばいいし」

そう、本当は必死にならなくったって、いつでもここにあるから。あたしが創った、あの曲だけは。行き先がわかればそれでいいし、最初から形なんて必要なかった。音にできるなら、それでいいのだ。

どこか申し訳なく感じ、あたしは久我から目を逸らしてしまう。久我は一度視線を落とすと、また乞うようにあたしを見た。なんか……――

「……ふ」

「へ？　なに、ふって？」

「ごめ……なん、か、犬みたいだなぁって」

唐突にこみ上げてくる笑いを必死にこらえながらそういった。笑いすぎて、涙が出てきそうだった。男のくせに、この人はなんでこんなにかわいらしい顔をするんだろうか。もしかしてこれも、計算されたものなのだろうか。

「は？　ちょ……なにそれ、めっちゃ失礼だろっ！」

久我は目をかっと見開いて、赤い顔をしてそういった。どうやら気に入らないらしい。

「ほめてるつもりなんだけど……っ」

何がおもしろいとか、ここで笑わなきゃとかそういう計算なんてひとつもなくても、素直に笑えた。本当に涙が出るくらいに、かわいいとも思ったしおかしいと思った。

「いや、笑ってるし……バカにしてるっしょ！」

「そ、そんなわけないじゃ……ふ」

さっきまで、海で見ていた久我とは一八〇度違うんじゃないだろうか。

あのとき見た横顔は、とても大人びていて、綺麗だと思った。だけど、こんな、別の顔もある。

ふと、今まで怒ったようにしながらも一緒に笑っていた久我が、少し真面目な顔つきに変わった。

「なんだー……笑えんだね、加賀美。いつもそうしてればいいのに」

「おもしろくもないのに、笑えないよ」

この間いつ声を上げて笑ったか、そんなこと思い出せないくらいに昔の話だ。あたしの顔はいつもいびつに歪むだけで、愛想笑いさえも充分にできない。

昨日からあたしは、本当におかしい。きっとどこかのネジが粉々に壊れてしまったんではないのだろうか。

「俺がいるじゃん」

真面目な顔してそんなことをいうから、あたしはまた笑ってしまった。

「できないよ」

昔も今も、クラスの中にあたしに話しかけようなんて思う人は、いない。久我だって、教室で、みんなの前で、あたしとしゃべらな

いだろう。それが暗黙の諒解。あたしは名前だけのクラスメートだ。
あたしはあの中へ入っていけないし、誰もそれを望んでいない。
たとえば久我の気づいていなかった寝癖を見て笑うのは、あたしじゃなくて他のクラスメートだ。

ひとつ大きく、息を吐き出した。

「じゃあね。あたし帰る。ここまで送ってくれてありがとう」

久我に背を向け、改札に向かった。
休日でもスーツ姿の人は多かった。圧倒的に若い人の方が多いけれど。あたしと久我も、たとえばあそこにいるカップルのように見えるのかもしれないな、そういう目で見ている人がいるかと思うと、少しおかしかった。ありえない、そう思った。

「――加賀美！」

久我の声に、うしろを振り返った。人の疎らな構内には、その声がよく響いていた。

「また、明日なっ」

手を振っていた。あたしは笑って、小さく手を振り返し、歩き出した。
今日が終わっていく。それをさみしいと、思った。
二度と戻らない時間。
それでいいのだ、と思った。もう戻らない。
きっともう、交わらないのだろう。あたし達の時間は。
なんとなくだけれど、そんな気がした。

第3話

ピピピと目覚まし時計の電子音がしてあたしは飛び起きた。急いでアラームを止める。それからじっとベッドの上で息を潜め、部屋の外から音がしないことを確かめる。

しばらくして、母親を起こしていないとわかったあたしはほっと息を吐いた。それからTシャツに中学のジャージという寝巻きのまま、大きな音を立てないことに細心の注意を払って部屋の外へ出た。

そっとリビングを覗くと、ソファには誰もいなかった。ただそこにあったガラステーブルには空のビールやチューハイの缶がいくつか置いてあった。それを両腕で抱え、台所に向かう。

適当にゴミを処理し、冷蔵庫を開ける。牛乳のパックを取り出して、コップに注ぎ一気に飲み干した。それからそこにあるもので弁当を作り始めた。余ったおかずは皿に取り分けてラップをかけ、冷蔵庫へしまった。気づいたら母親が食べるだろう。

それから食器を洗い、一通りの家事を終える。この時間は洗濯ができない。母親を起こしてしまうからだ。いつも休日にまとめてやる。二人分の洗濯はそんなペースで十分だった。

顔を洗い、制服に着替える。一通りの準備が済むと、家を出るのにはちょうどいい時間になっていた。

あたしは何もいわず、極力音がしないように玄関のドアを閉め、鍵をかけた。それからすぐにそのアパートに背を向けて、駅へ向かった。

あたしが学校に着く時間帯、教室に人の姿はほとんどない。その日も誰もいない教室に着き、時計を見ると始業までは四〇分程の余裕があった。

席に着くと、とりあえず、と思いロッカーから今日ある教科の教科書を準備する。空だった机の中にそれらを詰め込み、すぐに手持ち無沙汰になった。しょうがないので適当に教科書をめくり、時間を潰す。

いつも通り、そうして過ごしていた。

「おはよう！」

うしろから、突然声がした。それとほぼ同時に視界にあった教科書が楽譜に変わる。誰かが入ってきたことに全く気がつかなかったあたしは、びくりと肩を揺らした。

「……久我、」

「へへ、やっぱ早いなー。あ、楽譜返すね」

「ありがと……」

眠いのだろう、振り返った先にはどこかとろんとした目つきの久我がいた。今にも閉じてしまいそうだ。

「ね、加賀美はケータイ持ってる？」

「ない」

「じゃ、家電教えてー」

「連絡網でも見れば？」

「ケチィー、俺の番号教えてあげるって」

「別に、必要ないし」

「いーの、毎晩かけてよ！　そこは」

寝惚けている、口調までどこか舌足らずになっているし、いっていることがめちゃくちゃだ。でもそんな久我を見ていることに、どこか優越感にも似た感情を覚えてしまう。

「で、なんか用？」

「んー、特には？」

首を傾げ、深く深く笑った。作り笑いだ、本当は用があるのだろう。

「早く、いいたいことあるならいえば？」

それだけいって、あたしは視線を逸らした。返してもらった手の中にある楽譜を見つめる。確かに、あたしの楽譜だった。久我はこれを、どこから持ち出したんだろう、ふと疑問がわいた。

「じゃ、写真撮らして？」

「昨日断った」

「えー、でも楽譜返したよね？」

「……そうだけど、」

「じゃあー、放課後遊びに行っていい？」

「は？　どこに？」

「音楽しつー、ダメ？」

楽譜が勢い余って力のこもった手の中で無残にもくしゃりと音をたてた。

「……知って、たの？」

「うん、けっこー前からね」

あたしは思わずため息をついた。人に聞かれていたとは思っていなかったからだ。誰かに聞かれるのは、あまり好きじゃない。それが自分だと知られているならなおさらだ。

「えーっと、ダメ？　俺、ジャマしないよ？　おとなしくしてるし、ね？」

机をじっと見つめていたあたしの表情をうかがおうとしているのか、背後からぐっと背中を曲げて横から覗き込もうとしてる。

結構前っていつから、どこで聞いていたんだ。ぐるぐると頭の中で口に出せない疑問と憤りが回っている。確かに、大人しくしているのだろう。現に今まで誰かに邪魔された覚えはない。

「ねー、聞いてる？　加賀美ぃ？」

あぁ、じゃあやっぱりあの日、あたしは楽譜を音楽室に置いてきたのだろうか。確か途中で郵便局に行かなきゃいけないことを思い

出して、あわてて帰ったのだ。そう、初めは確かにあったのだ。だからきっとそのときに置いて来て、久我がそれを取っていった？

「もー、返事しろよ。加賀美ー、もう姫！　姫って呼んじゃうよー？」

あぁ、でもそう考えるとあの日も久我が聴いていたことになる。嘘だ、嘘であってほしい。記憶違いかもしれない、もしかしたら教室に、でも教室で楽譜なんて出すわけがない。わざわざスクールバッグから盗っていくなんてさらに考えにくい。何しろ目立つ。

「姫、姫、ひーめーっ！」

「うるさい！」

はっとして大きな声を出してしまった。久我が驚いているが、あたしも自分に驚いていた。何が起こったんだ。

「っくりしたー、」

「ごめん……」

放心した状態のまま、謝罪の言葉を口にした。何か変だな、そう思ったがそれが何なのかはわからない。

「で、放課後いい？　姫」

「……ん」

どうせもう聴かれているし、かまわないか、と思った。自分の知

らない所で聴かれている方がよっぽど怖い。
「なーに、姫。それってオッケーてこと？」
何か変だ、思いつつもうなずいておいた。
「やりっ！　ありがとー」
「あぁ！」
おかしい、違和感の正体に気づいたあたしは思わず大きな声を出してしまった。それからきっと久我を睨みつけた。
「えっ、ちょ、やっぱダメとかなしだよ！」
「名前！」
「は？」
「名前で呼ばないで！」
あたしがそういうと、久我はわけがわからないというようにぽかんとした表情を浮かべて固まった。それからしばらくその間抜けな顔を睨んでいると、突然笑い出した。
「ちょ、や、カワイー！　何この子！　カワイー！」
「うるさい、ちょ、騒がないでよっ」
「カーワーイー！　ちょ、ダメ！　耐えらんない！　俺、走ってく

るー！」

「はぁ？」

そのまま久我は本当に走って教室を飛び出していった。それから始業のチャイムが鳴るギリギリまで、教室には戻ってこなかった。教師とほぼ一緒に教室に入ってきたときには、一緒にいた上田沁（ウエダシン）のうしろから思い切り抱きついて、ほとんど引きずられるようにして入ってきた。

「せんせー、こいつ重い。どうにかしてくださーい」

「ヤバいんだって、マジで！　どーしよー、シン！」

「お前ら朝からうるさいな、とっとと席つけ。久我、お前は何がしたいんだ」

「え、セーシュン！」

「あほか」

クラスメートがそんなやり取りを見て笑い、会話をしながらも上田は久我を引き剥がし、あたしの隣にあった空席に座った。本当に久我はあほだ、あたしはため息をつき、窓の外を見つめる。空はどこまでも青く晴れ渡っていた。

放課後、あたしはひとりで音楽室へ向かう。この高校に入学して、音楽室の設備を知ってからずっと習慣になっている。

第二校舎へ行くには、今いる二年の教室が並ぶ第三校舎の二階から渡り廊下を歩けばすぐだ。帰る準備を整え、スクールバックを肩にかけて教室を出た。

そのときちらりと見かけた久我は、教室の掃除当番だったらしく箒を振り回して遊んでいた。一体どこの小学生が紛れ込んでいるんだ、と呆れてしまうが、久我を含めた他のクラスメートの楽しそうな声を聞いて、いくつになっても結局、やっていることは子供の頃と大して変わっていないのかもしれないと思った。

階段を二階分登る。いつも通り、どの教室からも人がいるような気配は感じられず、とても静かだった。あたしの足音だけがやたらと校舎に響いている。

あたしはいつも通り、ピアノの蓋を少しだけ上げて、音が響くようにする。本当は奥にいくつか練習室として、小さな個室が三室、そこにピアノが一台ずつ完備されている。防音もしっかりしているが、白い壁紙に囲まれたあの狭い空間はどうにも馴染めないので、あたしはいつも音楽室のピアノを使っている。

少しでもどこか遠くへ、音が届いていきますように。あたしの音が、響いていきますように。どろどろにあたしを汚染しているこの空気に、この音が少しでも残っていけばいい。そうしたらあたしは、この音と一緒になれる。

そんな無謀な願いを、指先にのせる。

いつか、あたしの呼吸を妨げている、この喉の奥の塊も、音にしてとばせたらいい。そんな風に、思った。

言葉も目もいらない。ただ、音が残ればいいなと思った。音になって消えてしまいたいと、思った。空気に残るわずかな振動の中に、

溶けていきたい。

鍵盤にかかっているカバーをはずし、白と黒のなめらかな手触りを感じる。

ポーンとひとつ、音を出した。弦を叩く、確かな感触。この瞬間が一番、好きかもしれない。

あたしは椅子を引いて浅めに腰掛けた。浅く腰掛けて立つようにして弾く、一番落ち着ける姿勢だ。

そのまま、思いつきにまかせて、曲を弾く。大抵は誰かの曲。たまに、即興で。一度弾き終えたら、気に入ったフレーズやミスした小節、納得いかないところを、気がすむまで繰り返していく。

なんでもいい。なんでもいいから、弾いていたい。その間だけはあたしを誰も邪魔しないし、何も気にならない。だけどあの、ドアの向こう側が気になっている。昨日のことを考えると、いつものようには集中できないでいた。

落ち着かない心臓も頭の中で繰り返している映像も声もすべて必死でかき消すように鍵盤を叩く。それでも落ち着かずに、ただ弾き続けていた。それもガチャリと大きな音と共に扉が開いたことで、あたしの集中力も落ち着かなかった心もさっと波のように引いていってしまった。

久我が来たのか、まさか、ありえない。そう思って目を向けると、そこには女子生徒が立っていた。見たことある顔だな。始めはそれくらいにしか思わなかった。これは、あたしが出ていった方がいいのだろうか。

何をいわれるのか、彼女は何をしに来たのか、そう思って彼女の動きを待っていると、その子はずかずかと肩を怒らせてあたしに近づいてくる。その顔は強張り、怒りに満ちていた。空気は一瞬にして張り詰めたものに変わった。

自分が何をしたのか思い出そうとするが、誰かと会話をした覚えすらないあたしは当然ながら面食らった。ただ、彼女の顔をじっと見返すことしかできなかった。

化粧をしてぱっちりと開かれた目は、今にも泣きそうに潤んでいる。この顔は、見たことがある。そうだ、クラスメートにこんな顔の人がいた。名前は確か、芳野麻衣（ヨシノマイ）だったか。女子生徒の中ではリーダー格というか、クラスの中でも目立つ存在だった。

赤茶に綺麗に染まった髪、身長はあたしより五センチくらい低かったか。スカートが短い、細い身体。

確か、いつも久我がいるグループの中にいた人だ。その光景を思い出して、きっと彼女は久我のことが好きなのだろうと思った。クラスでもよく久我と芳野麻衣の二人をからかう声を聞いたことがある。もしかしたら二人は、付き合っているのかもしれない。

とにかくあたしは彼女のただならぬ気配を察知して、ピアノに視線を戻した。そこに、ない楽譜を思い浮かべてみる。弾かなくても流れだすメロディー。心地よい、音。それ以外にここから逃げる方法が、思いつかなかった。

彼女の怒りは確実にあたしへ向いている。

「あんた、一体、なにしたの」

少しふるえた声で、でもどこか強い威圧的な口調で、芳野麻衣はいった。それは呆れる程に怒りの感情がはっきりとしていた。火を見るより明らかって、こういうことかもしれないな、ぼんやりとそう思った。

「なにって？」

あたしは、わからない、という風に返す。実際、わからなかった。人違いじゃないのか、と思わずいいそうになったが、とりあえず話を聞く心情にはなっていた。
芳野麻衣は、眉間に深い皺を何本も作り、あたしを睨みつける。さっきよりもさらに、強く。

「あんた一体柳平になんていったのよっ……、どうやって近づいたの！」

声が上ずって掠れている。芳野の様子から、完全に興奮して頭に血が上っているのは明らかだった。何をいっても、まともに聞けるような状態ではなさそうだと判断する。
こういう状況に慣れていないあたしは、ただ座っていることしかできない。ただ黙って、聞いていることしかできない。

「なんの、こと？　多分、芳野さんが思ってるようなことなんて、なにもないけど……」

抑揚なく、返す。刺激しないようにと静かに口を開いたが、いってから言葉を考えていなかったことに気が付いた。今の状態から考えたら、これは喧嘩を売ってるようにも聞こえるかもしれない。むしろ、これだけ興奮している人間にはどんな言葉も無効だろうか。
横目でちらりと見た芳野は、すでに泣き出している。透明なしずくがしたしたと彼女の頬をつたう。

「なにもないわけないじゃないっ！　あんたなんか、あんたみたいな根暗な奴なんかに、なん、で、柳平が……っ」

ヒステリックにそれだけいい切ると、またさっきのように、目を

きっと鋭くさせて、睨んだ。
そんなに気になるのなら、久我に直接いってしまえばいいのに。そんなこと、あたしだってわかるわけがないのだ。こんな風に誰かに理不尽な追求をされるなら、自分からはっきりと聞いておけばよかった。
あたしなんかより芳野の方が、ずっと久我に相手にされている、と思う。
せいぜい退屈しのぎだ。きっと、その程度。

「……なによ、その目。バカにしてるんでしょう……っ、むかつく、こっち向けよっ」

そういったから、見上げるように芳野の方を向いた。
やっぱりこの人は、かわいい。女の子だ。多分、守りたくなるような。
一瞬、何か冷たいものがあたしの頬を走る。その直後、そこは熱を帯びた。殴られた、と認識するのには結構時間がかかった。目の前でこんなぼろぼろに泣いている人間に、こういう衝動があるものだとは思わなかったのだ。

芳野は唇を噛み締めて身をひるがえし、走っていった。扉の閉まる音が、あたしのところまで重く、響く。泣いていたな、やっぱり最後に、そう思った。あたしのせいではないはず、なのに、あんなのただの言い掛かりなのに、あぁ、悪いことをしてしまったな、と思った。

芳野が出ていったのを見計らったように、外階段の扉が開いたのはすぐだ。そいつと目が合うと、あたしは反射的に、皮肉に笑ってみせた。笑ってるだなんてとてもいえないような、きっとひどい顔をしていたと思う。

「盗み聞き、」

ひょっこりと顔だけ出した久我は、本当に情けない顔をしていた。

「ごめん」顔の前で両手合わせて頭を下げている。

その姿は単純に間抜けで、おもしろいものだった。笑ったかもしれない。わからない。

胸まで伸ばしていた髪が、殴られた頬を隠していた。髪が覆っているせいで、そこには余計に熱がこもっていくようだった。

久我はそのまま音楽室の中に荷物と一緒に入り込んで、あたしに近づいてくる。ぱたぱた、小走りで。それから膝をついてしゃがみ込むと、覗き込むように、あたしの髪をかきあげた。

「別にいいけど。でもなんでそんなところか――」

「ああっ！　おま、腫れてきてるし！　ちょ、待ってろ」

「いいって、あ……」

あたしが止めるのも聞かないで、久我はさっきよりもずっと早く走って、行ってしまった。勢いよく閉まった扉の音は、思いの外大きな音をたてた。

「バカだなぁ」

無言の扉に、言葉を投げた。急にこの場所が空虚なものに感じられた。こんなに頬が熱いのは、殴られたせいじゃないかもしれない。

だってもう、熱いの、左側だけじゃないから。顔全体が、久我が触れた髪の毛の先まで全部、別の生き物みたいだと思った。

あたしはもう、きっと、あの目だけは忘れられないんだろう。きっと、久我の目だけは忘れない。
そっと、左の頬に触ってみる。熱い。殴られたせいだ。それ以外の原因なんてない。
誰もいなかったけれど、誰にも見えないようにうつむいた。髪の毛が視界を埋めていく。だんだん見えなくなった。
目を閉じても、思い出すのは久我の瞳の色だ。

《あんたなんか、あんたみたいな根暗な奴なんかに、なん、で、柳平が……っ》

「――っ、」

急激によみがえる、さっきの声。芳野、泣き顔。
あたしは、何をしているんだろう。こんなの本当は、おかしい。あんな風に、久我があたしのために何かするなんて、泣いて帰っていった芳野じゃなくて、あたしに。芳野のいった言葉は、本当にその通りだと思う。

ギィィと、ドアの開く音がした。神経が瞬時に扉を開けた人物へ向かう。鉄の扉を、自分の体重をかけるみたいにして開けて、その人は入ってきた。久我だ。袖をまくって、白いタオルを持っている。どうやら手が、濡れているらしい。
それからまたぱたぱた、小走りであたしへ近づいてきた。

「とりあえずこれで冷やせ。悪いな、氷もらおうと思ったんだけど、先生いなかった」

息を切らして戻ってきた久我は、迷うことなくあたしの頬に濡れたタオルを押し付けた。それはひんやりしていて気持ちいい。あた

しは伸びた腕の先を、久我の顔を、見上げた。

「……あたしなんか、関わらない方がいいって。あんなかわいい彼女さん泣かせてどうすんの」

「彼女じゃないし、」

「同じだよ」

芳野が久我のことを好きなのは、変わらないから。二人は周りに認められていて、あたしは根暗な奴だから。

こんなのは、おかしいのだ。あたしは多分、いや確実に、久我とは関わってはいけないの種類の人間だ。あたしみたいなのは、もっと、誰とも関わらない所にいるべきなのだ。今までだってそうしてきた。そのことを一番理解しているのは、あたしだ。

そしてあたし自身も、そうすることを望んでいるから。

「ごめん……俺のせいでこんな――」

「そんなのどうでもいーって」

別に、殴られたこととかどうでもいいって。あたしみたいなのは、どうでもいいんだって。

声には出さずに、そう付け足しておいた。

「こんなの、すぐ、治る」

違う、もっと……久我には大切なことがある。あたしと関わらなければ、きっと違う展開になっていたはずの、そういう未来が。誰にだって、ある。

「よくねぇよ！　姫は女なの――」

「でも、芳野さんだって……傷ついてるんじゃない？」

久我はうつむいたきり、何も答えなかった。そこはただただ、静かだった。

誰にも見せない、その胸の奥で。誰も入れない、気持ちを持って。そういうものはきっと、生きていればみんな大なり小なり持つものだ。誰にも理解されない、理解されたくない、この気持ちはだれにも負けないとか、そんな風に思うことはきっと、ある。

たとえば芳野だって、久我を想う気持ちは、そういうものは、変わらないはずだ。

「でも、俺、応えられねえし……。それに、俺は姫が撮りたいんだよ」

「なんだ、それ。答えになってないって、」

「姫しか、撮りたくないんだよ」

久我はあたしに、もしかしたら自分にいい聞かせるかのように、少し強い口調でそういうと、目が合う前にがたんと椅子を引いて、そこに座った。不意に手を放されたせいで、濡れタオルはべちゃりとスカートの上に落ちた。あたしはそれを拾って、また久我を見つめた。

背もたれに寄りかかり、目を閉じていた。それから、さっきとは打って変わって、やさしい口調で呟く。

「あの曲、弾いてよ」

あたしはタオルを久我の座っている席の机に置いた。それから鍵盤に向かって座りなおす。ひとつ深い呼吸をおいて、あの曲を弾いた。名前のない、あの曲を。

おそらく、今泣いているであろう、彼女を想って。

あたしの曲を求めた、彼を想って。

そして静かに芽生えはじめた、名前のない、この胸の気持ちをこめて。

＊＊＊

第４話

あの日から、何かが変わり始めていた。
あたしの中の何かも、周りの何かも、すべてが変わっていきそうな気がした。わからないのに、見えないのに、それでも何かは変わっていた。
あの日、久我と始めた会話をしたそのときからずっと、それは始まっていたのかもしれない。
久我と一緒に過ごす時間は増えていった。ほとんど毎日放課後になると、久我はいつのまにか音楽室にやってくる。
知らない間に音楽室のどこかにいて、じっとあたしがピアノを弾くのを見ている。それはやはりどこか冷めているような、一線を感じさせるもので、不快なものではなかった。

そんな、誰も知らない放課後。そしてこれは、久我が知らない放課後だ。

「調子のってんじゃねーよっ」
「なにしたんだっつーの、あんた」
「エンコーでもしてんの？　そんでさー、久我くんも誘ったんだー」
「うわ、サイテーじゃん、ヤリマンとかさぁ」
「センセー、この人セイビョー持ってまーす！」
「やだ、汚いし！　移さないでよねー」

目が合っても見えないフリをしてわざとぶつかってくる。何かの用で話しかけることがあっても無視される。無視された、かと思えば通りすがりに耳元で低く蔑まれる。

「悪女」「尻軽」「死ね」「ウザい」「消えろ」

くつもノートも教科書も、子供じみたいたずら――いわゆるいじめ――の跡がくっきりと残っていた。何をいわれたのかも、何をされているのかも、もう自分ではわからなかった。

まさか高校に入ってまでこんな低レベルなことされるとは、感心にも似たため息がもれた。

別にどうにかしようとは思っていない。あたしは何もしないし、何もいわない。何も感じない。だから、抵抗も原因もどうでもいい。

それでも原因は、わかりきっていた。久我とあたしが関わり出したせいなのだ。

放課後の習慣を芳野が知っているとは思えない。そのことに関して一度も触れてこないからだ。

けれど確実に、教室での久我の態度は変わっていた。久我はあたしと目が合うと、笑う。それは作った愛想笑いじゃないし、久我は堂々と話しかけることもある。それを見ていた担任なんかは、『仲良くなったんだったら加賀美、このバカに勉強教えてやってくれよ』なんてことをいい出す始末だ。

きっと芳野には、あたしから久我に近づいたように見えている。違うのに。本当に、あたしは何もしていない。と思う。

教室でのあたしは変わらずひとりで、でも、以前とは違うひとり

で。
だからあたしは、学校が嫌いなのだ。他人じゃない誰かと過ごすことは、苦手だ。いつだってうまくいかなくて、息苦しい。
あたしは、いない存在になりたかったのに。
今まではうまくいっていたのに。

「――っ、いっ」

「あ、ごめーん」

うしろからくすくすという笑い声が続く。六月で夏服への移行期間。半袖のシャツで、腕を守るものが減った。その途端に、あたしは長袖のカーデガンが手放せなくなった。

「もう、カッターの刃、危ないじゃん。ちゃんとしまわなきゃー」

「うん、ごめんねー。でも怪我しなくて良かったー」

まるで何事もなかったかのように、女生徒三人は笑いながら通り過ぎていった。暑さに耐え切れずに、カーデガンを脱いでいたのがいけない。あたし自身は何もしていないのに、あたしの腕には切り傷が耐えない。
綺麗に一筋の新しい赤い線が浮き上がる。傷自体は深くはないけれど、あたしはどうして、こうして傷つけられなくてはいけないのだろう、と思う。考えるだけ無駄だとわかっていても、考えずにはいられない。

あたしが何も反応しないのを、いいと思っているのだろうか。彼女達は、一体あたしをどうしたいのだろう。苦しめたいだけなのか、それとも殺したいのか。

あたしは、何もわからない。ただ、理不尽だな、と思う。だけど、あたしはそういうものを吐き出されるために、ここにいるのかもしれなかった。それならそれで、いいと思った。そうあるべきなのかもしれない、そう思った。

「なぁ、そんなの着て、暑くないの？」

「……別に、普通」

「そっか、」

思わずさっきの傷を、カーデガンの上から押さえる。気付かれちゃ、いけない。久我は、知らない方がいい。こんな汚い醜い感情は、あたしの中でしまっておくべきだ。

放課後の時間はあたしにとって大切な時間で、同時に手放すべきものだった。

それでも、わかっていても、久我になんていったらいいのかわからなかったし、ピアノから離れる選択はできなかった。ここが、この場所が唯一のあたしの居場所だった。

ふと、いつか久我がいっていたことを思い出す。きっと、あたしにとっての家はここなんだろう。

適度な広さ、あの人が知らない場所、そこにピアノがある。なくしたくなんてない。

いつかここを卒業して、働くようになって、そうしたらあたしはあの家を出ていかなければならないのだろう。そこできっと、やっと、本当の家を手に入れるのだろう。それまでここが、あたしの家なのだ。

帰る場所は、誰にも奪われたくなかった。この場所を今なくしてしまったら、あたしが壊れてしまうと思った。

いつかここを離れてしまう。離れなければいけないときが来る。それと同じように芳野も久我も、いつかなくなるものだ。そんなもののために、家をなくしたくはなかった。一日だって放したくなかった。その間に誰かに奪われたら、あたしはどうしたらいい？

考えても考えても、今以上に当たり障りのない状況なんて思いつかなくて、どうにもできない苛立ちと自分の弱さとわがままさ加減がどうしようもないものに思えて、帰りの電車の中であたしは少しだけ、泣きそうになってしまった。

わからないように、家へ入るのは難しい。

今日は、あの人の仕事は休みの日だ。気付かれないように、あの人の世界を壊さないように、アパートの階段を昇る。ただ、機嫌がいいことを祈りながら玄関へ向かう。

鍵を取り出し、開ける。起きていたらこの音で気づくだろう。その代りに玄関のドアを、音がしないように静かに開けた。けれどその音は、あたしにはひどく大きく、重く、響いてくる。できる限り呼吸を長く、深くする。それは家に入る前の、落ち着くための、儀式みたいなものだ。

「……ただいま」

声がふるえないように気を付けながら、刺激しないように小さな声で、帰ってきたことを知らせる。カタンと、何かの音がした。必要最低限の音を出さないように、くつを脱いで家の中へ上がった。

廊下をずっと奥までいったリビングへ続くドアの、すりガラスの向こう側に、あの人の姿を見つけた。いつものソファの上に、座っているのだろう。黒髪が見え、テレビの音がもれていた。

あたしは音を立てないように、あたしの部屋へ、この家に唯一用意された、あたしの場所へ、静かに向かう。部屋のドアノブに手をかける。ガチャン、と大きな音がして心臓は飛び上がったように大きく跳ね、なんとなくドアノブにかけた手をぱっと離してしまった。あたしじゃない、音のした方を振り返る。

「――っ、」

「……あんた、」

母さんが口を開けたのを見て、思わずびくりと反応してしまう。こんな声、していただろうか。母さんの声を聞く度、毎回別人のような気がする。どうしてか、母さんの声だけは覚えられない。

「これ、仕事、したいの？」

なぜか母さんが持っていたのは、あたしが買った履歴書だった。途中まで書いて、机に置き去りにしていたもの。あたしは、辛うじてうなづくことが出来た。けれど、足はふるえていた。

「ふーん。出てくの？　ここ。それでお金が、いるの？」

あたしはどう答えていいかわからずに、ただ母さんの瞳を見つめ返した。

ここを出ていく、それは母さんが望んでいたことではなかったのだろうか。それとも、今すぐに追い出されてしまうのだろうか。

「なんとかいったらどうなのよ！」

ぴしゃりと、母さんが叫んだ。酔っている。彼女が話す度にアルコールの匂いが強く鼻をついた。

「ちがう、けど。お金は、自分で稼ぎたい、と、思って……」

「うるさいっ」

完璧に酔っている。あたしは母さんが望む答えを考えることを諦めた。何をいっても、きっと同じだ。

何があったのかは知らないけれど、母さんはものすごく機嫌が悪いようだった。あたしはどうしたらいいのかわからずに、ただ黙って彼女の言葉を聞いている。小さな頃から何度も何度も繰り返されてきた、呪文みたいな言葉がまた、母さんの口から紡ぎ出された。ぼそぼそと早口で、知らない人が聞いたら何をしゃべっているのか到底理解できないだろうけれど、あたしにはその言葉が痛いくらいにわかったし、頭の中でも二重になって、別の声で、繰り返されて、うるさいと叫びたくなった。

「誰のせいでこんな目に合ってるのよ、この恩知らずっ。あんたがいなきゃ幸せだったのに……誰がここまで育ててやったと思ってんのよっ！」

母さんは最後にそれだけ大きな声でいうと、右手の親指の爪を噛んだ。酔っている。この人は、酔っているのだ。

「いいわ、もう。お酒買ってきてちょうだい。なんでも、飲めればいいわ。あぁ、なんか、枝豆がいい、食べたいわ。それも買ってき

て」

それだけいうと、彼女はまたリビングへ戻り、ばたんとドアを閉めた。あたしはとりあえず部屋へ戻り、制服を着替えた。お酒なんて、買えるのだろうか。だけど母さんになにかをいう気にはなれず、あたしは黙って家を出た。

《あんたさえいなけりゃ、あたしは幸せだったのに》

何度だって、その声は繰り返す。あたしに警告を、与え続ける。知っている、あたしだってそう思う。あたしさえいなければ、きっと幸せだった。そういう未来がきっと、あの人には用意されていたのだろう。

《あんたさえ、いなければ――っ》

あたしさえ、いなければ。

あの人は酔うと、急におしゃべりになる。いつも、あたしの存在なんていなかったことにしているだろうに、お酒が、あの人を変える。それでも、酔っていても、あの人のいうことはきっと、すべて正しい。

あたしは財布を左手に抱え、近くのスーパーへ向かった。小さなスーパーだ。コンビニの方が家からは近かったのだけれど、そこへは制服で入ったことがあるから、止めておいた。だいたい、枝豆なんてものは、コンビニには置いていないだろうと思った。

白い、着古したTシャツに、青いジーンズを穿いただけの、非常にラフな格好で歩いていく。足元は、ビーチサンダル。駅とは反対側の、車一台がやっと通れるくらいの細い道をひとりで歩いた。本

当は、一本向こう側の大通りを歩いた方が近い。けれど、あたしは車が好きじゃない。だから、この細い道をわざと選んでいつも歩く。

今はまだ、フラッシュバックが怖い。

《姫、見える？　あの雲、おさかなさんみたいだねぇ》

そういえば父親とは、よく空を見ていた気がする。肩車をしてもらって。あたしは、父親の髪を触るのが好きだった。

あたしさえいなければ、あの人も死んでいくとき、そんな風に思ったのだろうか。空を見て、そこがあまりにも青くて、雲ひとつ見つからなくて、あたしはそこで考えるのを止めた。

わかるわけがないのだ。そんなこと、わかりたくもない。

スーパーに着いて、入口で緑色のかごをひとつ持った。中に財布を放る。枝豆と、お酒。それだけ買って、早くあの家に戻ろう。戻らなくちゃ。帰る、は、多分違う。

ふらふら視線を泳がせながら、店内を回った。枝豆は冷凍のものを取って、お酒は安いビールとチューハイをぜんぶで四本、かごに入れた。すでに酔っているのだから、これだけあれば充分だろう。安かったから、ヨーグルトも一緒にかごに放り込む。ストロベリー味。レジは空いていて、中年のおばさんとあたしと同じ歳くらいの青年、二人の店員がいた。あたしは奥にいた青年の方のレジへ向かった。お酒は簡単に買うことができた。

家に戻ると、さっきよりもそこはずっと静かになっていた。テレビの音がしないんだ、と、すぐに気がつく。

「……おかあ、さん？」返事はない。

キィキィ軋む廊下の音が、疎ましい。あたしは半分開き直った気持ちで、リビングのドアに手をかけた。五センチくらい開けて、左目で覗き込む。淡いブルーのソファが目に入った。いつも、母さんが座っている場所。だけど、姿は見えない。あたしはそのままリビングへ入り、ソファの上を背伸びをして覗き込んだ。背もたれで隠れて見えなかったけれど、母さんはそこで眠っていた。ガラスのテーブルにはすでに空になったビールの缶が五、六本転がっていた。いつから飲んでいたのだろう、この人は。

「かあ、さん？」

ソファへ近づく程に、アルコールの匂いはひどくなった。眠っている。静かに上下する肩を見て、安堵した自分がいた。

顔をよく見ると、そこには涙の跡があった。泣きながら、眠ってしまったのか。あたしは自分の部屋へ行き、毛布を引っ張ってくる。あたしが使ってるものなんてこの人は嫌かもしれないけれど、母さんの部屋に入るだけの勇気はなかった。

買ってきたものをすべて冷蔵庫に入れて、ヨーグルトと店員がつけてくれたプラスチックのスプーンを持って部屋へ戻った。ドアを閉めてそのまま座り込む。ドアを背もたれにして、ヨーグルトのふたを開けた。スプーンのビニールを破って、その辺にゴミを放る。

一口、口に運ぶ。甘い。

あたしは、あの人が怖い。未だに、怖い。

あたしは、いない存在になりたかった。いない、それでもいい。生きていたい。それ以上は、望まないから。

「……ごめんなさい」

わがままなあたしをどうか、許してください。許せなくても、せめて認めてください。

床の軋む音が聞こえた気がした。食べ終えたヨーグルトのカップを床へ放る。

「ごめんなさい……」

足を抱き寄せて、そこへ顔をうずめた。そのまま夜が来るまで、あの人が眠るまで、そこで耳を澄ませて、ただただじっと座っていた。

ここには朝なんて、永遠にやってこないんだよ、自分にいい聞かせるように、頭の中でそっと呟いた。

＊＊＊

第5話

最近、ジリジリと太陽が熱を増した。夏はすぐそこにいる。というか、もう夏かもしれない、そう考えて、そういえばもうすぐ七月だったことに気がついた。

昨日は、階段を昇ってる途中で多分わざと、ぶつかられた。耐えきれずに落ちて少し頭を打ったけれど、まだ怪我はしていない。それでも、腕はあまり人に見せられる状態ではなくなっている。

笑い声だけを、覚えている。あたしの耳は、イヤな音ばかり拾う。でもそのどれも、あたしは覚えられなかった。芳野の声も、その取り巻きの声も、曖昧すぎて思い出せない。

いつもの放課後。その日はあたしが行くより早く、久我が待っていた。ピアノのふたも、すでに開いていて、どうやら準備をしてくれたらしい。疲れているのか、久我はとろんとした眠そうな目であたしを迎えた。

今日は子守唄でも弾いてやろうかな、顔を見ながらそんなことを思う。そんなことをしなくても、久我はすぐに眠ってしまうだろう。

「おはよー……」

「寝てた？」

「うー……べつにぃ」

おもしろい生き物が生息しているな、寝ている久我の髪の毛に手を伸ばしかけて、止めた。久我は目を閉じているからか、気付いていないようだ。

こんなこと、本当は止めるべきなのだ。そう思うのに、どうしても言葉にできない。あたしは、罰を、欲しているのかもしれない。

「ねそう……」

そういって久我は机に突っ伏した。それを見て、あたしはくすくすと笑ってしまう。やっぱり子供みたいだ。傾き始めたオレンジ色の陽射しが久我の顔を照らす。その色に、いつかの海を思い出していた。

久我といる時間が出来て、あたしは少し、笑うようになったと思う。放課後のこの時間だけでも、あたしは確実に変わっていた。自分でもわかるくらいに。そしてそれは多分、久我も同じなのだ。

久我といると、何も気にしなくてよかった。何もしなくても怒らないし、焦ることも気を使う必要もない。安心に似たような感情。

突然、今まで寝ていた久我がビクッと身体をふるわせて起きた。机にあごを乗せ、まだあまり開いてない目でしゃべりだす。

「なぁー、うちのクラス、伴奏者でないんだけどー。やって？」

「だから、やらないって」

もうすぐ学校は夏休みに入る。この学校は九月末に『合唱コンクール』なるものがあって、曲決めは一学期中に、というのがお約束だった。

あたし達のクラスは曲も指揮者も決まっている。問題は、伴奏者が出ないことだ。

お決まりというか、指揮者は今そこで眠そうにしている久我で、

伴奏者に関して正確にいえば、『立候補者がいない』のではなく『ピアノを弾ける人』がいないらしいのだ。
だから、こうして久我はあたしに絡んでくる。いつもだったら今頃眠っているだろうに、最近ではクラスでもずっとこの話ばかりされる。久我が何かいい終わる前に、あたしは逃げてしまうけれど。

「いいじゃない。アカペラでやれば」

「やってよーっ」

ガバッと起き上がり、バシバシと机を叩く。まるでネジ巻き式のシンバルを叩くサルのおもちゃみたいだ。ため息みたいにふっと、小さく息をもらした。

「あたし、弾けないもん」

「嘘つけやー」

むっとした顔で、久我はあたしの額を指ではじいた。少し痛い。はじかれた所を左手で押さえて、久我を軽く睨む。ひゃは、と久我は笑った。つられてあたしも、自分の唇の端が上がっていることに気がついた。

もし、あたしが伴奏者になったら、ステージには誰もいないかもしれない。いや、あたしが立てなくなるだけかな。
久我が指揮者というのは、芳野達には余計に悪く映ってしまうだろう。去年も同じような理由で担任に伴奏者にされたことを思い出した。今年は多分、久我がこの通りだから担任が出てくることはないだろう。
どちらにしても、だ。たとえ担任がそれを決めようとも『これ以

上近づくな』という無言のメッセージは、すでに痛い程感じている。

「……あたしが弾いても、誰も歌わないよ」

「大丈夫。俺が歌うから」

さらりと久我はいう。やはりそれは、どこか楽しそうだ。ずっと、この感覚は消えない。いつまで経っても久我は、あたしの隣で、楽しそうにしてくれる。そんな顔を目にしたらなおさら、あたしは本当のことをひとつもいえなくなってしまう。

どうせ、久我にいってもどうにもならないことなのだ。こうして、普通に話ができるだけでも、本当は感謝しなくてはいけない。この習慣がばれていないのは、ほとんど奇跡だ。

「ひとりじゃ、意味ないでしょう？」

「でも姫、伴奏者にでもならないと参加しないでしょう」

ね、と笑顔で同意を求められる。あたしはどう答えたらいいのかわからなくて、確かにそれはいわれた通りで、視線を逸らしてしまった。去年も、伴奏者だったから練習に参加していただけで、確かに熱心ではなかった。

「ひとりいないのも、ひとりしかいないのもさー……どっちも同じだと思うんだけど。だめ？」

「ダメ」

この動揺は、気付かれてはいけないものだ。誰にも。あたしだって、気付きたくはなかった。

久我の目を見ていると、あたしは否応なく自分の気持ちに気づかされてしまう。見透かしたような、真っ直ぐな久我の目は、嘘をつけなくさせる。

「……しかたねーなぁ。強攻手段しかねーか」

「……なにそれ」

予想してない話の展開に思わず久我を見た。

「イヤ、それはねー、秘密でしょ！　んま、明日になればわかる」

そういって久我はいじわるく、にやりと笑った。カタンと音を立てて立ち上がると、距離が縮まった。久我の顔を見上げると、やわらかく笑って、ぽんと頭に手が置かれた。

「帰ろっか」

イヤだ、と反抗したかった。けれど素直に「うん」としか、いえなかった。

「加賀美さんって、柳平と仲良いよな」

その声は突然かけられた。隣の席の男子にだ。帰りのホームルームのときで、ちょうど久我が前に立って、合唱コンクールのパート分けやら伴奏者やらの話をしているときだった。

あたしが声をかけられたことに、さらにその内容に驚いて顔を見ると、話し掛けてきた人物は頬杖をついて、前を見つめていた。

「……そんなことない、」

あたしも前を向いて、目を合わせないままそう返した。周りは騒がしいから、会話は話している本人くらいしか聞き取れないだろう。

上田沁は、久我とよくいるグループのひとりだ。席替えは面倒だから学期に一回、という担任により、クラス替えをしてすぐにやった席替えから、ずっと隣の席だった。それでも、話し掛けられたのは初めてだった。

「だったらなんで、黙ってんの？」

上田の声が少し低く、イラついた、刺々しい声に変わった。あたしは驚いて、目だけで彼を見る。

「あんた、いじめられてんじゃん」

その言葉が何を意味するのか、すぐには理解できなかった。ぱっと上田の顔を見ると、さっきまでと変わらない退屈そうな表情をして前を見ている。あぁ、そうか。この人は気付いているんだ。

あたしはひとりで、それが以前とは違う、ひとりだってことに。

何も、返すことができなかった。いじめだと思う、あたしも。だけどそれを黙っていて、何か悪いだろうか。

「じゃあもう時間ないし、練習はじめたいしー」

真面目そうに、それでもたまにへらへらと笑いながら、話を進めていく久我。そのうしろで本当はこの話を仕切るはずの合唱コンクールの委員が、書記にまわっている。

「伴奏者、っていうか弾ける人、正直に手を上げなさーいっ」

笑う声、なんとなく、久我に見られている気がする。けれどあたしは上田を睨みつけていたから本当かどうかはわからない。

これはあたしのことなのに、どうして他人にイラつかれなくてはならないのか。あたしは一度だって助けを求めたつもりはないし、いじめられようがかまわないのだ。それをどうして今さら、他人に介入されなくてはならないのか。見てみぬフリをしてくれればいい。そこで良心の呵責だとかを感じられても、困る。

「――おーい、柳平。加賀美さんがやってくれるってよ」

「は？」

「おし、どうせ他にいないだろー？　じゃ、加賀美さんは伴奏者決定なっよろしくー」

ざわざわと騒ぎ出すクラスメート。突然向けられた、いくつもの視線。前を向く、あたしの名前を黒板に書く委員。久我を見る、にやりと笑った。

――冗談じゃない、

言葉は喉まで出掛かって、消えた。

「柳平はバカだから、気付いてねーよ」

ぼそっと、最初に話した調子で、やっぱり前を見たまま、上田はそういった。

「……その方が、いいでしょ」

あたしが上田を睨みつけていると、突然こっちを向いたから目が合う。ぶつかった視線には、敵意みたいな、そういうものが込められていた。

「そういうの、エゴだろ。悲観ぶってんじゃねーよ」

「いいがかり、やめて。放っておいてくれない？」

関わるつもりなんて、始めからなかった。あたしのことなんてみんな、関わらないように、いなかったと、思ってくれればいい。望んでいる、それを。あたしはそうなりたい。

いつかは久我だって、放っておけば離れていくんだろう。

「人の気持ちってもんがわかんねーのかよっ」

少し息を荒げてそういった上田を、あたしはただ睨み返した。そんなもの、わかりたくもない。人の気持ちを理解するなんて、それこそエゴじゃないのか。

ふいっと上田が顔を逸らした。あたしも前を向く。それから上田が話し掛けてくることは、なかった。

「なあ、怒ってんの？」

「別に……」

「やっぱ怒ってんじゃーん！　マジごめんって」

ホームルームが終わってすぐ、久我はあたしの下へひょこひょこ

とやって来た。あの犬みたいな、あたしが何もいえなくなる目をして。卑怯だ、わざとだ、そう思いつつも、やっぱりその目を見たら何もいえなくなってしまった。

「だって姫、自分からは絶対いわないじゃん？　だから誰かがいえばやってくれっかなーと思ってさ」

全然悪いと思っていないみたいに、肩を竦めて久我が笑った。

「ごめん、あたし、帰るから」

なんとなく今は、久我と話したくなかった。目を、見れなかった。席を立って、久我を見ないように顔を伏せた。一瞬、上田と目が合う。細めた目、睨まれているような。すぐに逸らして、教室を出た。呼び止められたような気もしたけれど、かまわずに廊下を歩いた。

「加賀美！」

「――っ、は」

うしろから誰かに肩を掴まれた。急なことで誰の声かもわからない。心臓が縮まるほどに驚いて振り返る。顔を見て、やっと息を吐く。呼吸を忘れていたなと、そのとき思った。

「なんの用？」

「ちょっと、来て？」

一見穏やかそうに笑った芳野のうしろには、いつもいる女子が二

人。堪えきれないみたいにくすくすとイヤな笑い方をしていた。ダメだ、何回も聞いてるはずの声が、初めて聞いたような知らないものに感じられて、どうしようもなく気持ちが悪い。

返事も聞かずに芳野がスタスタとあたしを抜かして歩き始めた。ついていかなければいけないのだろうか。そんなことを考えているうちに、うしろから背中を押された。よろけて二、三歩踏み出す。行かなきゃいけないのか、あたしは黙って芳野のうしろをついていった。

着いた所は、使っていない空き教室だった。資料室や図書室、音楽室に視聴覚室だとか、普段の授業ではあまり使われないような特別教室ばかりある、あたしがいつも来る第二校舎の中にある、特に名前も付いていないような教室だ。当然、人気はない。

「むかつくんだよねー」

「ホント、どんな方法で近づいてんだか知らないけどさー」

よくわからないまま、突き飛ばされた。後方へよろけて、壁にぶつかる。もう一度、今度は強く、両肩をつかまれて壁に押し付けられた。

「――っ、ぁ」勢いに負けて頭を打つ。

そのままずるりと壁にもたれる形で体勢を崩すと、髪の毛を引っ掴まれた。座るに座れなくて、痛さに目をつむった。

「調子のってんじゃねーよ、ブス」

わけのわからない言葉を何度も吐き出されたけど、そのほとんど

を忘れてしまった。覚えているのは、笑う声の気持ち悪い高さくらい。

殴られたかもしれないし、蹴られたかもしれない。よくわからない。空きっ放しの掃除用具入れと倒れた箒も見えたから、もしかしたらそれを使って叩かれたかもしれない。とにかく体中が痛かったし、目を開けるのは億劫だった。

あたしがやっと目を開ける気になったのは、ある音がしたから。チキチキと、カッターの刃を出す、あの音だ。

「いつもカーデ着てるけどさ、あれ、痛かった？」

薄く開けた目に映るのは、さっきの女子三人。それから、カッターの刃。

「でもさ、これならもう、隠せないよねー」

髪を引っつかまれる。頭がちぎられるみたいで痛い。――あぁ、それだけはやめてほしい。そう思ったけれどもう、掠れた呻き声しか出なくて、カッターの刃、その先にはずっと伸ばしてきた、あたしの髪の毛。

はらりと、床に髪の束が落ちた。だらりと力なく垂れていたあたしの腕にもそれはかかって、くすぐったいような変な感覚がした。

「ねぇ、わかった？　もう二度と、近づくなっていってんだけど」

「あたしらだって鬼じゃないしー、加賀美が約束してくれんならこんなこと止めるって」

「いいから返事、しろよ」

「っあ、んぐ、」

むわっと生臭い匂いがして、ぱさぱさしたものが口の中に押し込められた。布、タオル、雑巾？　元からしゃべるような気力はなかったけれど、異臭と口の中の異物で呻き声すらくぐもってしまう。気持ち悪い、けれど吐き出すような力もなかったし、誰かが吐き出させまいとぐいぐい押し込むから息もままならない。

「ほーら、早く返事しろよ」

「伴奏者もさ、必要以上に近づいちゃダメなんだからねー？」

破ったら指でも折っちゃう？　という恐ろしい言葉が聴こえた気がした。そんなことをされたら、死んでしまう、と思った。

この人達はあたしのすべてを奪うつもりだろうか。それならいっそ、苦痛もすべて取り去ってくれたらいいのに。

死ねば、楽になれる？　あたしはどうして、生きていたかったのだろう。今以上に怖いことなんて、ピアノが弾けなくなる以上に怖いことなんて、何かあっただろうか。

吐き気を感じたけれど、嘔吐するよりも呼吸をすることに必死だった。息苦しくて、意識を保っていられそうにない、と思った。

それでもなんとか誰かが階段を昇るような足音を聞き取って、それから名前を呼ばれたような気がした。

朦朧とした頭、力の入らない体。あたしは必死になって、左手で思い切り壁を叩いた。そこはちょうどドアで、がたんと予想していたものよりも大きな音が響いた。

「あんた、なーにやってんの？　そんなことしてなにがいいたいワケ？」

足音は、確実に近づいてくる。二人分だ。勢いよく、ドアが開いた。

「姫ー？」

女子生徒の息をのむ声。

「なに、やってんの、お前ら」

誰、わからない。首を動かして、左側に目をやる。やっぱり、二人いる。あたしを名前で呼ぶ人なんて、もう、ひとりしかいないじゃないか。

迷うことなく、誰かも見ないまま、目を閉じた。どうなってもいいんだって、思った。きっとどうにかしてくれる、そう思った。

そのまま一切の音が聞こえなくなった。

＊＊＊

第6話

《ねぇ、姫、どうして空は青いんだと思う？》

いつも肩車をしてくれる父さんが、やわらかくて真っ黒な髪の毛が、大好きだった。休日になると決まって、大通りの公園まで連れて行ってくれた。

あのときの自分がなんて答えたのか、答えはなんだったのか、もう、思い出せない。

《あんたなんてことしてくれたのよ！　返して、あたしの、あたしの――っ》

もう、戻ってはこない。

気がついたら血まみれだった父さんと、泣き崩れる母さんの姿。それから首に絡みついた指と、今では染み付いてしまった言葉。

いない存在に、なれたらよかった。誰も気にしない、誰にとっても他人みたいな存在に。誰にも迷惑をかけない、負担にもならない。だからその代わりに、どうしても生きていたかった。とにかく死にたくなくて、それだけだった。『死ぬ』ことが、どういうことかわからなくて、そんなわけのわからない所へ行くくらいなら、何をいわれても、何もなくなっても、生きている方がマシだと思った。

でもそんなの、いつもうまくいかない。

「――めっ、姫！　起きろ！」

「ん……」

「姫っ！」

「おい、あんま揺すんなっ」

取り返しのつかないことがたくさんあって、それをフォローできるだけの力は自分にはなかった。たくさん悪いことをしただろうな、と思っている。

それでもあたしはやっぱり、子供だった。

気持ち悪い。目を開けて一番最初に思ったのはそれ。体が痛くて、重くて、熱かった。薄く開けた目に映るのは、間近で顔を覗き込む久我の顔と、そんな久我を呆れて見ている上田の姿だった。

「……ちかい、」

「だってよ、ほら、離れろ」

「ひめー」

「うるせー」

さっきと場所は変わっていない。空き教室の中だ。あたしは、何をしていたんだろう。いつの間に芳野達はいなくなってるんだ。

鈍い動きできょろきょろと目を動かして、周りの様子をうかがう。目を閉じていたのはほんの一瞬のような気がするのに。

「気ィ、失ってたの。わかる？」

上田がそういってしゃがみ込んだ。さっきよりもよく顔が見える。
「あいつらなら、帰した」

「そう……」

立ち上がろうと床に手をつく。じゃり、と髪の毛を触った感覚。
さっき、切られた髪の毛だ。足に力をこめる。けれど、うまく立ち上がれなかった。目の前に暗い影が落ちて、前を見る。久我が背中を向けてしゃがんでいた。「のれ」

あたしは何も考えず、その背中に手を伸ばした。
これは、逃げているのかもしれない。ふと思う。
あたしは、不条理とか理不尽なこととか、そういうものを吐き出されるために、ここにいるのかもしれなかった。いない存在にはなりきれなかったから。
それなのにこうして誰かに手を伸ばすのは、間違っている。

「ごめん……」

「姫はなんも悪くないだろ」

「……ごめんなさい、」

弱くて、ごめんなさい。ひとりじゃもう、抱えきれないと思った。ダメだとわかっていたのに久我を遠ざけることもできなくて、知られるのが怖くて、それなのに今こうして助けを求めてしまったこと。全部、情けなくて。
確かに覚悟したはずだったのに。ひとりでいい、誰にも必要とされなくていい。その代わり、あたしも求めないから。

「帰ろう。もう、無理とか、しなくていい」

首に腕を絡めて、肩に顔をうずめた。やさしい匂い、安心するような。なんてことないみたいに、久我は簡単に立ち上がった。夕日で満ちた教室、そこはとてもあたたかで。

「なんでもいって。じゃないと俺、わかんないから。なんでも聞くし、絶対、守るから」

あまりに久我がやさしいから、周りに溢れるものがあまりにやさしいから、今度は安心して目をつむることができた。そこにあった闇に、ひどく安心した自分がいた。

ずっと昔に置いてきてしまった、穏やかな感情。依存して、すがって、いつだって助けてもらっていた自分。

そこにはあたしをひとりにしないすべてがあって、あたしはそこが大好きで、やはりそれがすべてだった。

あのときはまだ、母さんだって、笑ってくれていたのに。

いつから、こんな風に変わってしまったのか。もうずっと生きることが、呼吸をすることが、苦しかった。あたしの酸素はもうずっと前に枯れて、消えてしまった。だけど、まだ、許されるなら。

許してくれる人がいるのなら。

「……り、がと」

少しだけ、泣いた。一時でもかまわなかった。やさしさにもう少しだけ、浸っていたかった。

ゆっくり、久我が歩く。その度に揺れる振動が、なんともいえず心地よかった。一段一段階段を下りて、昇降口へ向かう。荷物は上田が三人分を持ってくれていた。

「ね、久我？」

「なんだよ」

「眠っても、いい？」

「……いいよ」

何も考える余裕がなかった。とにかくあたしは安心しきっていたし、居心地がよかった。

久我といるといつもそれだけで、息苦しい世界がやさしく思えた。いつもと違う、心地良い傷みと一緒に。

歩く振動を感じながら、深呼吸をしてみた。やさしい匂いで満たされていく。

間違っていると、理解している。それでも。

あたしが眠るまでに、そう時間はかからなかった。

「おにーちゃーん、彼女さん起きたよーっ」

目が覚めて真っ先に目に入ったのは、見覚えのない、ツインテールの女の子だった。

体を起こすと、蒲団が掛けられていたことに気がつく。ベッドの

上だ、とようやくそこで気がついた。この部屋は、見覚えがある。
ぱたぱたと女の子が部屋を出て行って、そこでやっと自分がどこにいるのか気が付いた。壁には写真ばかり並ぶ、ここは、久我の部屋か。入口から見て左側の壁に沿う形で置かれたベッド、部屋の奥を頭にして置かれている。

あたしはあのまま眠ってしまい、久我にここまで連れてきてもらったのだろう。その間のことを何も覚えていなかった。ずいぶんぐっすりと眠っていたらしい。

それから廊下を走る音が聞こえて、ふすまを見つめた。多分、久我が来るはずだ。

「姫！　生き返ったぁ？」

「死んでない、」

必死な、本気で心配そうな久我の顔を見て、目を伏せて笑った。嬉しい、単純にそう感じた。誰かに心配してもらえるような、やさしさを与えてもらえるような、そんなくすぐったいことはほとんど初めてだと思う。
ちゃんと、いわなきゃいけないな、と思った。

「久我、」

「なんだよ」

ゆっくり歩いてきて、ベッドの脇にひざをついて久我は座った。目線があたしより低くなる。真っ直ぐな茶色い瞳が、痛い。刺されたみたいだ。その傷みすら、久我に与えられているのなら心地いい

と思ってしまう。
ギシリ、床の軋む音。開けっ放しだったふすまに、人影。
「――っ、」
「やっと、起きたの？」
冷たい、あの人はあたしを、蔑むような目で見るから。怖い。
「他人に迷惑かけないでって、いってるでしょう。どうしてわからないの？」
ぎゅうっと、掛け蒲団を掴んだ。その手はふるえていたかもしれない。
「ご、ごめんなさ――」
「帰るわよ。早くしなさい」
母さんはまた、ふっと姿を消した。床の軋む音。誰かの話し声。
早く、早く行かなくちゃ。帰る準備を、早く。
「姫？　ホント、大丈夫か」
「平気、久我も、ごめん。いろいろ」
慌ててベッドから降りたら、腹部がきりりと痛かった。痣かな。
「あたしのカバンは？」

急に手をつかまれた。異様に熱を持って、熱すぎるくらいの手。

「な、に」

「ふるえてる」

右手を久我に取られて、見上げられる。見透かしたような目で、なぜかわからないけれど睨みつけられた。

「は、はなして」

「なぁ、まだ、いうべきことない？　っていうか、さっきの続きは？」

「な、なんでもない……」

「守るよ、俺。さっきもいったけどさ、俺バカだしね、話してくれなきゃわかんないんだって」

首をふった。放してほしかった。早く帰らなきゃいけないのに、こんな風にあの人が来てくれるなんて、あたしのためにあの人が何かをするなんてありえないことなのだから、きっとすごく機嫌が悪い。怖い。

それに、そのまま久我に手を握られていたら、息苦しいことを全部、吐き出してしまいそうだった。

これ以上負担になるなんて、助けなんて求めちゃいけなかったのに、ガンガンと頭の中でいつもの呪文がリピートする。わかってる、わかってるから、そう叫び出しそうになる自分を必死で抑えて、空気すらももらさないように口を結んだ。

「姫っ」

ぐいっと腕を引っ張られて、あたしは簡単に体制を崩した。倒れた先には久我の胸があって、背中にまわされた腕は苦しいくらいに強くあたしを引き寄せた。

「俺は、ダメ？　力になれない？　なぁ、わかってんだろ。俺バカなんだって」

泣くわけには、いかなかった。やさしい匂い、それは少し息苦しいくらいに近くにいる。心臓の音が、自分のものと同じくらいに早くて、二重に響いてうるさい。

本当はすがりついて泣いてしまいたいのに、それはできなかった。あたしを待つものは、あたしが待つものは、あたしのためになる誰かなんてものはすべて、ない方がいい。

誰にも迷惑をかけることなく、生きられたらよかった。誰かに頼らなくても、生きていけるならよかった。人間全部、他人だったらよかった。そうしたらきっと、みんな自分本位になって、誰かを守るとかそのために傷つくとか、そんなことが全部なくなるから。

こんなことで簡単にやさしさに甘えてしまう、その腕を離すのを惜しんでしまう。自分はなんて浅はかだったんだろうか。一時でもそれを望んでしまったら、溢れてしまうって、戻れなくなるって、わかっていた。求めてしまうって、わかっていたのに。

「はなして、あたし、行かなきゃ」

「ごめんな」

「もういいから、はなしてっ」

「ダメだよ。だって」

不自然な体勢のまま久我の足の間にひざをついて、胸に顔をうずめて、もうこれ以上ないってくらいの力で抱き締められていて。体中が痛かったような気もしたけれど、それ以上に触れた所が熱くて、どんどん熱を高めていって、耐えられなかった。

「こんな、怯えてんのに」

おかえりって迎えてくれる母さんが、大好きだった。寝かしつけてくれるときにやさしくとんとんって叩いてくれる手が、睡眠薬だった。あったかい食事、当たり前だったそれが、幸せだった。

簡単に壊れてしまった、当たり前が。

「こわ、い……」

「うん」

返してほしかったのは、あたしだって同じだった。やさしかった母さんを、返してほしかった。大好きだった。

「……怖い、こわい、こわいの」

「なにが？」

「か、さん……も、ずっと、見てくれないの、あた、し、いるのに、いないのっどこにも、ないの……っ」

父さんが死んだときに、あたしも一緒に死んでしまえばよかった。一番大好きな人が愛した人を奪って、存在を否定された。
一番大好きな人に認めてもらえないなら、それならいっそのことそういう存在になろうと思った。そうなることで、初めてあたしが認められるんだと思った。

「いなく、なれな、くて……っ」

久我の背中に、自分も腕をまわしてみる。ふるえながら掴んだ服、それだけが頼りみたいに。あのときは、掴むことができなかったけれど。

「み……みとめて、ほしかっ……」

あのときあたしは子供だったから、大人にすがることしかできなかった。母さんが大好きだったから、いつか戻ってくれるって、昔みたいにやさしい母さんに、それをずっと、信じてたから。
それまでは、迷惑かけないようにって、それで母さんの気がすむなら、これは当然の罰だから。

「たくさん、」

髪の毛をすり抜けていく指。やっぱり気がついたら、泣いていた。これ以上ないってくらいに、体は熱くて、ちょっと泣いたくらいじゃ体温なんて下がりはしない。むしろ上がる一方で、涙は止まらなくて。

「さみしかったね」

本当はずっと許してほしかった。認めてほしかった。

ごめんなさいと、伝えたかっただけなのに。さみしいと、知ってほしかったのに。つらい気持ちを一緒に、共有したかっただけなのに。

伸ばした手をつかんでくれたならそれで、充分だったのに。

もう、無理だったんだと思う。殻にこもって自分を守ることも、許されなかった。いわれた言葉を全部受け止めて、記憶して、それでも音だけは忘れた。綺麗な音だけを覚えていたかった。

あたしを殴る前の母親の顔も、イジメることが趣味な同級生の笑った顔も、全部覚えている。忘れてはいけないと思った。痛みを、苦しみを、忘れるなといわれているんだと思った。それを与えるために人がいて、あたしはそれを与えられるためにいるんだと思った。

それなのに、久我はやさしすぎた。

それが当たり前のように笑って、名前を呼んで、会話をしてくれた。一方的じゃなかった。あたしに何かを求めてくれた。

久我がくれるものは全部あたたかすぎて、手放せなかった。普通の人間になれたような気がした。初めて誰かに認めてもらえたんだと思った。

もう、無理だったんだと思う。

このまま涙も流さずに、ただただじっと受け止め続けることは、無理だったんだと思う

「……泣くのね」

廊下から、久我の背中の向こう側から、声がした。わからないはずなのにそれは多分母さんの声だと思って体がびくりと反応した。頭の中でそれは別の音になって何度も繰り返される。怖い、怖い、怖い。

怖くて何もしゃべれなくなって、久我の腕の中でふるえを堪える

ことに必死だった。怒られると、思った。

「そう、泣くのね……そうよね、あなたはそうやって、泣いて、生まれてきたんだもんね」

母さんの声だ、そう思った。思っていたよりもずっとそれは穏やかな声だった。揺れる髪の間でふるえる唇。もうずっと、思い出せなかった、昔の、昔のままの。

「……帰ろう、姫。大した怪我、してなくて本当によかった」

昔のままの、やさしい母さんがいた。驚いて目を見開く、そこにいたのは確かにあたしの母さんだったけれど、笑っていた。昔みたいに、やさしい顔で笑って、そこにいた。

「か、あさん？」

「ごめん、ね、姫、いままで、ずっと……」

あの母さんが、あたしの前で泣いた。それはかなり衝撃的な映像で、信じられなくて、それでもじっと母さんの言葉の続きを待った。

「弱くて、姫にせいにして、ごめんなさいね。謝っても、許されないことだろうけど」

さっと涙をぬぐい、母さんはいった。

「帰ろう、姫。一緒に、帰ってくれる？」

一度久我の顔を見て、腕を離す。久我もわかってくれたのか腕を

ほどいた。
あたしは半信半疑のまま、母さんへ近寄った。この人は、こんなに小さかったか。いつのまにか背を追い越して、それでもいつも大きく見えていた。
確かめるようにその頬に、ぬぐい切れなかった涙にふれた。そこには確かに体温があって、それは確かにあたしの母親で、あたしが一番大好きだと思っていた人だった。

「……ごめんなさい」

左手で、母さんの手を掴んだ。ずっと、頑張ってくれてた。ずいぶんとしわが増えた、小さくなった手を、掴んだ。ゆっくり、視線を上げる。

「――っ、ごめん。ごめんねっ」

抱き締められた腕は思ってたよりずっと細くて、母さんの体は薄かった。

最初に、この腕をつかんでいたらよかったのかもしれない。迷わないで、拒絶を恐れないで。
泣かなければいいと思った。わがままをいわなければいいと思った。静かに、大人しく、いうことを聞いていればいいんだと思った。そうすればいつか母さんはあたしを見てくれて、前みたいにやさしく頭をなでてくれるんだと思った。
かなしかったのに、さみしかったのに、怖かったのに、悪いと思っていたのに、あたしはどれも口にしなかった、泣かなかった、謝れなかった。
その代わりに、父さんの死をかなしむ余裕すらなくなった。痛めつけられて罵られて否定されて、それを耐えたらいつか元に戻るん

だと思っていた。
始めから、全部口にできていたらよかったのかもしれない。
二人でただ静かに泣いて泣き続けて、言葉になっていない謝罪の言葉を繰り返した。母さんが名前を呼んでくれることを、あたしはどうしようもなく嬉しく感じた。
いつのまにか廊下には久我の母親らしき人もさっき見た女の子も見ていたことはわかっていたのだけれど、一度溢れ出してしまったそれは簡単に止まるものではなかった。
伝えられなかった何年か分の感情があふれていた。

「生きてて、怪我、なくて、よかった……本当に、よかったっ」

母さんは何度も何度もそういっていた。そういってくれた。
泣き疲れたのか、安心しきってしまったのか、あたしは体から力が抜けていくのがわかった。

「姫っ？」

久我の声だ、ずるずると床にへたり込み、うしろへ倒れそうになる。誰かが、久我が体を受け止めてくれたことがわかった。久我がいると改めて思うと、あたしは余計に安心してしまった。閉じたまぶたはもう持ち上がりそうにない。
もしも夢なら、覚めないでこのまま死んでしまいたい。どろどろになって空気になる。

「姫、死んだ？」

「……ばーか」

必死で薄く開けた目の先に、笑っている久我が見えた。
もしこれが夢じゃないのなら、次に目が覚めたときはちゃんと伝えようと思った。芳野のことも、母さんとのことも、この胸の痛みも、すべて伝えよう、そう思った。
あたしは突如襲ってきた眠気に耐えきれずに、そこで目を閉じた。
暗闇にも、夢にも、もう怯えなくていいんだ。安心しきった体はもう、あたしのいうことを聞いてくれそうになかった。

「ごめ、ん……」

必死で唇だけをそう動かすと、あたしはそのまま久我の腕の中で眠ってしまった。すべてが闇の中へ溶けていったけれど、確かにそこには久我の声と匂いがあったから、何も怖くなかった。

＊＊＊

最終話

《ねえ、姫、どうして空は青いんだと思う？》

手を伸ばしたら掴めそうな雲。ジリジリと肌を焼く太陽。時折吹く風が、気持ちいい。

ずっと昔に着てたという、母さんの白いワンピース。少し丈が短いけれど、サイズはぴったりだった。

胸まで伸びていた髪はもう、かろうじて肩につくくらいの長さしかない。

ザァン、ザザンと一定のリズムを保って、裸足の足を冷たい波が濡らす。その度に少しずつ砂をさらっていって、くすぐったい。

「姫、なあ、こっち向いて」

「手に持ってるものしまってくれるなら、」

「それは無理」

息を吐くように、小さく笑った。左うしろの方にいる久我には、少し肩が揺れたくらいにしか見えないだろう。

また、空を仰いだ。そこはただただ青くて。その下に広がる海も、やっぱり、青くて。

「ねえ、」

「なんだよ」

「空も、海も、限りないものってなんで、青いのかな」

涙が、枯れないように。遠く、広く、雨が降るみたいに。
空に手を、伸ばした。何かが掴めるような気がした。そこに何かが、あるような気がした。
あのときの答えは、なんだったのだろう。

「うわ、」

伸ばした左の手のひらを久我の手がおおって、こつんとおでこに落ちてきた。右腕があたしの腰をまわって、いつのまにかうしろに立っていた久我に抱き寄せられる。ちょこんと顔を肩にのせて、頬擦りするみたいに寄ってくる。かかる息がくすぐったい。

「なに？」

「かわいくって思わず」

「ばーか」

もうすぐ、夏休みが来る。長い、長い休みが。

「誰がバカだってー？」

「久我しかいないじゃん」

「いったな？」

「え、ちょ、うわあっ」

久我がわざとその場に座り込んで、しっかり腰に回された腕のせ

いであたしまで尻餅をつく。波はちょうどひいていたけれど、砂浜はびっしょりと濡れていた。

「しんっじらんないっ！」

「へへー」

あたしはちょうど海に向かってまっすぐ体を向けていて、久我は右半身を正面にするみたいに座り込んでいた。文句をいってやろうと久我の顔を見たのに、当然だけど、波がばしゃんと戻ってくる。運悪く今度のは少し大きくて、頭までびっしょりとかぶってしまった。

「やっべー、ちょー気持ちー」

「あほかっ！」

思いっきり怒鳴りつけて、久我の顔を睨んだ。あははと笑って、無駄に楽しそうだ。海の水を少し飲んでしまって、口の中がものすごくしょっぱかった。

ふと、久我の視線が下がった。呆けた顔をしている。視線の先を追って、自分の体を見た。

「――っ、」

「エロ、」

「見んな、バカっ！」

ぐっしょりとかぶってしまった上に、着ていたものが白いワンピ

ース一枚だったため、下着が透けて見えていたのだ。恥ずかしくて恥ずかしくて、腕で隠してみる。それはそれで、自分で示しているみたいで恥ずかしい。
その場から動けなくて、顔を伏せた。久我が立ち上がったのはなんとなくわかったけれど、顔を見ることはできなかった。
びたっと顔に、何か重い、濡れたものを投げられた。

「……久我？」

この上何をするつもりだ、自分で驚くくらいに低い声。むかついて、ずるりと当てられたものを引っつかんだ。

「着ろ」

それは久我がさっきまで着ていた、黒いTシャツだった。恐る恐る久我を見る。「――っ、」上半身に何も着ていない。

「帰んべ。海水、気持ち悪いっしょ」

「……誰のせいだよ」

「え、俺？」

「ありえないっ」

むっと思いながらも、濡れたTシャツを上から着る。濡れているためか、着るのは一苦労だった。

「ほい、」

いつのまにやら久我はさっきまで出してたカメラをすっかり片付けて、重そうなカバンを肩にかける。笑顔と一緒に差し出された手を、しぶしぶ握った。

「風邪ひいたら、許さない」

「大丈夫だって。俺、バカだもん」

「久我の心配はしてないっ」

＝ＥＮＤ＝

最終話（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
これは、私が初めて最初から最後まで書いた物語です。何度も手を加え、書き直し、こうしてこの場で公開できるようになりました。
拙い部分はたくさん見える作品ですが、この物語を書けたことは本当に良かったと思っています。
読んだ後そこに何かが残ったり、考えたりしていただければいいなと思います。

本当に、最後までお付き合いいただき、感謝いたします。
ありがとうございました。

冴島岐之

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1743d/

呼吸

2010年12月4日16時47分発行